
ミッシングリンク

薄桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミツシングリンク

【Nコード】

N5005U

【作者名】

薄桜

【あらすじ】

科学技術の停滞期を脱した「パーフェクトJ」から340年。人類が地球を捨て、他の惑星に住まうようになって210年。それでも人々の生活は相変わらずである。

色々忙しくなる前に、友人とぱーっと思いつきり、惑星の外のリゾートホテルに行って遊んで来よう・・・って、そういうつもりだっただけなのに・・・あんな事が起きるなんて・・・

ある夏休みの朝

けたたましく鳴り響いた目覚ましに起こされて布団から起き上がり、眠い目を擦りながらカーテンを開けた。

現在の時刻は午前7時。

早朝の空はまだ暗く赤が濃い。空の西にはまだピンクパールがあり、入れ違いに出てくるブルーパールとの僅かの逢瀬を果たしているんだろう。

・・・ここからではどちらも見えないのだが。

思いつきり窓を開けて、ひんやりと湿気を含む空気を室内に流し込み、ついでに大きな欠伸を1つして、体の中の空気も入れ替えた。

『俺』ことリョータ・ミナミザワは、公立の大学に通う3回生である。

実家を離れて学校に程近い学生寮で、半一人暮らし・半集団生活を送っている。

・・・つまり、各部屋は個室だが、部屋から出れば共有スペースであり、一般の集合住宅よりコミュニケーション性は高い。

言い換えれば、学生の悪いノリで押しかけてくる連中のおかげで、プライバシーの程度は低い。

昨夜も、毎度毎度の悪友たちが迷惑承知で押しかけてきて、思い思いに酒やつまみで騒いでくれた。この夏の休みは朝からバイトをしつかり入れてるって、みんな知っててやってくれるんだからタチが悪い。

振り返れば、ほら祭りの後・・・テーブル周りには見事にゴミだけが残されている。

・・・いや違う。まだ一人残ってるな。

「おい起きろ、俺は下でメシ食ってくるけど。お前も行くか？」

コイツの頭・・・を蹴るのは少し遠慮して、床に転がる長年の親友
ジエイン・カーティの背中を踏みつけて揺り起こした。

「・・・まだ寝る。」

だらりとした体は俺より10cmは長く・・・いくら時が経とうと
も、相変わらず人種の壁は厚い。

「じゃあ自分の部屋で寝てくれ。」

「連れないう事を言うな・・・俺とお前の仲だろう？」

ジエインは転がって向きを変えると、シナモンの色をした長い髪が
まともに顔に張り付き、ヤツはそれを右手でどかした。

「どんな仲だ、気持ち悪い。」

邪魔なら切ればいいのに・・・もう何年もそう思い、言葉にもして
みたが「いいや切らない。」と言って突っぱねられる。じゃあ、そ
の髪型には何か大層な理由があるのかと思えばそうでもなく、「何
となく。」なんだそうだ。

「幼馴染。」

それはそうだが・・・。

「顔洗ったら下に行くから、戻るまでには居なくなってくれよ？」

「んー。」

その幼馴染は、目も開けずに腕だけ上げて、肯定とも否定とも取れ
ない声を上げた。

・・・本当に分かってんのか？

食堂の入り口で腕に嵌めた認証ブレスをスキャンして、学生コード
が表示されたメニュー表の朝定食のボタンを押すと、メニュー表の
下に表示された棒グラフの朝定食が、また更に1つ分延びた。

自分が何を食べたかの1月分の統計結果で、自己管理のためらしい
のだが、俺としてはこんな統計は別にいらないうちにある。

何故なら他のメニューはすべて、『0』という数字が表示されてい
るからだ。

『ジャポネの朝は米』これがうちの家訓だ。

惑星そのものが国みたいな集合体で、昔の地球にあった国だとかそんなのは、現在ではもうまったく意味もないのだが、どうもうちが民族意識が強いらしい。とりあえずこれが当たり前で・・・俺もそれが習慣になってしまっている。

毎朝毎朝同じメニューで飽きないのか？　と思われるかもしれないが、そんな事はない。実に親切な事にこのメニューは日替わりで、味噌汁の具や、魚の種類は毎日同じという訳ではないのだ。

奥でもう一度プレスをスキャンすると、朝定食のごはんと味噌汁、焼き魚と味のり、それから玉子焼きと漬物を載せたトレイが、カウンターに押し出される。そのトレイにお茶を追加して持ち、席を探して歩き出した途端に、

「リョータおはよう。」

サンドイッチを手にしたフカ・マーニユと、シリアルをスプーンで掬すくうミレイ・タンタンに手を振られた。

学生寮は当然のように男女で部屋が分かれているが、食堂やエントランス部分は共有だ。下手に引き離すより、適度に親交があるほうが問題が起きないとの判断か、それともただ単に、建設費用の問題か・・・まあ、どっちでもいい。俺は女の子と親しく出来れば問題無い。

・・・ただ、この二人はジェイン同様の腐れ縁で、お互い幼い頃からよぉく知っており・・・そう、人品人柄、言動に至るまで理解しているつもりだ。もちろんプラス面もあればマイナス面もある。弱味になりそうな思い出も、握っているし握られてもいる。おかげで、彼女たちに恋愛感情など絶対に発生しない。

「リョータはいつもそれだね？」

カフェオレのカップを揺らすフユカが、毎度の質問をしてくる。

トレイを見つめるヘーゼルの瞳に、多少の嫌悪の色が浮かんでいるのは魚嫌いが原因であり、彼女にも半分くらいジャポネの血が流れているのだが、朝定食を食べている姿など見たことが無い。

「習慣、これじゃないと朝ごはんを食べた気がしない。」

左肩辺りで纏めた黒い髪を無意識に触りながら、「ふーん。」と、気の無い返事を寄こした。

「二人とも、言う事がいつも一緒。」

ミレイが笑いもせず、お約束のネタに突っ込む。

こちらはグリーンの瞳に、短めのプラチナブロンドの髪をワックスで無造作に散らしている。この彼女、パツと見はモデルか何かのようにも見えるが、中身はカオスだ。

成績優秀で色々な事に詳しいが、妙な事を言い出したり、発想が不思議だったりする。

昔は人見知りの引っ込み思案だったが、いつからか我が道を行くようなタイプになった。

「ねえ、ジエインは？」

「あー、たぶん寝てる。きっと起きても二日酔いだろうな。」

「まーた、昨日も飲んだの？ いい加減にしないと体壊すよ？」
うん、心配してくれているのは分かるんだが・・・呆れて小ばかにするようなフユカの物言いには少しムツとする。

「・・・失礼だな。勝手に来て、勝手に始まったんだ。」

まったく迷惑以外の何物でもない。肉体を酷使する労働に励んでいる者にとって、睡眠がどれだけ大事かあいつらは分かってない。

「一緒に飲んでたら同じ。」

ミレイの言葉には、残念ながら何も返せない。

「・・・俺は先に寝たから、いつ終わったのか知らないけど、起きたらジエインだけ転がってた。」

「で、置いてきたんだ？」

「ああ、一応起こしたんだけど寝るってさ。」

食い終わって、自室に戻るとジエインは居なくなっていた。

・・・なんだ、ちゃんと起きて戻ったのか。

しかし、部屋に転がるゴミは相変わらずそのままの状態で、がつくりと力が抜ける思いがした。

駄目元で片付けて帰れって言うてみれば良かったな？ でもどうせ結果は変わらない・・・か。

思わず苦笑して、その際に視界の端に入った壁の時計にドキリとしてもう一度見た。

いやいやいや、こんなにのんびりしてる場合じゃない。急がないとバイトに遅れてしまう。食堂での雑談が過ぎたらしい。

科学が発達し、ロボットやアンドロイドはそれなりにいる。

しかし、きつい・汚い・危険。3Kの代表である土木作業は、依然として人の仕事として存在する。

詰まる所、完璧なAIが完成していかないのだ。簡単かつ単純な作業以外は、恐ろしくて任せる事が出来ない。

ロボットはある程度自分で判断しながら作業を進める事が出来る。

しかし不測の事態には弱い。演算性能を超えてショートし、もし万が一暴走した場合の損害は計り知れない。

過去に、高額なロボットを導入したが壊れて暴走。やっとの事で取り押さえても、現場には直せる者がおらず、電源も落ちず、仕方なく暴れるロボットを強引に壊した・・・という事が多発し、今はどここの工事現場もそんなリスクを犯そうとはしない。

そりゃ工夫をすれば使い用が無い訳じゃない。事前に掘る座標位置と深さをいちいち入力してしまえば、ロボットだって優秀な働きを見せてくれるはずだ。

だけど、『人がやった方が早い』・・・おそらくみんなそう思うだろう。

リモートコントロールという方法もあるが、設備に結構な費用がかかり、操作には資格を持った技術者が必要となり人件費が結構かかる。

・・・よって今、雇われ人夫の俺は、照りつける夏の太陽の下で舗装を剥がしたその下の赤い土と格闘している。

何十年も前に埋められた水道管の交換工事に勤しみ、勤労の汗を流している。

長い夏の休みを実家にも帰らず、何故こんな事をしているのかももちろんこれにはちゃんと訳がある。

逆に、実家に帰りたいのかと訊かれたら、そこは『はい』とは言い難い・・・いや、話が逸れた。

あー、すべては夏の終わりに企画した、きつと楽しい旅行のためだ。宙に浮かぶ、ちよつとリツチなりゾートで豪遊・・・とまではいかないまでも、就職活動なんかで忙しくなる前に、存分に今を楽しもう！ というのが趣旨だ。

メンバーも気心の知れたいつもの幼馴染4人。

これまではずつと一緒だったが、この先はどうなるか分からない。

そんな不安もきつとある・・・。

だから。

仕事の内容は肉体と精神を酷使するが、倦厭されているだけに日当はいい。

旅行までの日数も大して無いし、時給の安いヌルイ仕事を長時間するよりは、こっちの方がいいかなって、安直な選び方をして・・・最初の3日くらいは後悔したけど、今はさすがに慣れた。

ベテランのオツチャンたちも、似たような年頃のアルバイトも、皆裏表の無さそうな豪快な人種で、普段、無遠慮に珍しがられる事

の多い、純潔のジャポネである俺も、ここでは気兼ねが無いのが良い。

人類が徐々に地球を捨てて新たな惑星へと旅立ち、雑多な人種が入植して国の概念が消えた。惑星が国に近い意味合いを持ち、時間の経過と共に人種は混じった。

・・・のだが、うちの先祖はそうでは無かった。

つまり俺みたいなのが稀なのだ。

別に悪い事をしている訳では無いので、気にしなければ良いだけなんだが・・・俺はそんなに悟った人間でもない。

気兼ねなく付き合ってくれるいい友達に恵まれて、本当に良かったと思っっている。

だから俺は、目標額に達するまでは、この暑さに負けるわけにはいかない！

両の頬を叩いて気合を入れ直し、入道雲の立ち上がるコーラルピンの空を見上げると、太陽はひたすら眩しく、この星の衛星の1つであるブルーパールが薄っすらと存在していた。

ある夏休みの朝（後書き）

はじまり、はじまり〜

あー、やっとU.P.出来る。

全13話でいっせいです。

惑星コトラル

長きに渡る年月と莫大な費用、大量の人材をかけて尚遅々として進まぬ人類の悲願。見上げた空の更に先、そう、遙かな宇宙へと踏み出す事は叶わなかった。

大気圏から僅かに離れた軌道の上で、青く美しい星を見られるのは、ごく限られた研究者の特権だった。

しかもそれには多額の費用をかけて、大層大げさな施設と装備を作り、少しばかりの実験道具と一緒に送られて、しかも彼ら自身が人体実験の人柱だ。

やがて、大きな成果を上げない国家を上げての大々的なプロジェクトは、当たり前のように徐々に先細り、夢と希望に溢れた科学者の頭を悩ませた。

人々の関心も、現実的なものから一昔前の、夢を語るようなそれに再び変化していった。

しかし衰退する宇宙への夢は、ある一人の天才の登場によって激変する。

『J・G・カーティ』

彼は地球の重力から脱する際の、これまでのような重厚な装備とは一線を画す、シンプルで軽微な仕組みで宇宙へ飛び出す理論を発表した。

当然、既存の概念を無視する論理に学会からは疎んじられたが、彼は未だ年若く、学者に似合わぬ美麗な風貌で、一般大衆の・・・特に女性からは多大な支持を得た。

それを利用しようとマスコミも飛び付き、彼の姿をTVや雑誌で見かけるのは当たり前になった。

そして彼は、そこで得た対価と、金と暇を持って余した幾人かのパトロンからの資金を受けて、自身の理論をあっさりと証明してみせた。

それが宇宙時代の元年となる、『パーフェクトJ』だ。
ちなみにこの名は、この時期を指す事もあれば、カーティ博士を指す事もある。

けれど、カーティ博士はその技術をいくつかの企業に譲り渡すと、歴史の表舞台からあっさりと消えてしまう。

歴史上での活動期間というのは、実は5年程度のものだ。

しかし、その謎と魅力の多い人物は、後の世でも色々な説が噂され、未来人、宇宙人、違う次元の人間だと、正答の得られない眉唾物の議論が一部で白熱した。

そうして近年。

この一人の天才がもたらした急激な変化は、科学技術の発達具合から見て極めて不自然であるとされ、間に無ければならない技術の抜けた、繋がらない鎖・・・ミッシングリンクと呼ばれている。

夕方バイトが終わり、事務所のシャワーで汗を洗い流した後は大学の図書館に向かった。学生の本分は勉強である。

夏の長い休みにも、それなりにやらねばならない事があるのだ。

昔ながらの紙の資料を探すのに疲れ、端末でレポート用に資料を漁り、今更ながらの一般常識しか出てこなかった事に幻滅して机に突っ伏した。

人類が地球にへばりついていた最後から、宇宙に出るまでの『ミッシングリンク』と呼ばれる部分の謎をテーマにしようと思気込んでその中心にいるカーティ教授についての資料を探していたが、新しく面白そうな物はさっぱり見つからなかった。

いや正確には、ヒット数が膨大過ぎて、それに一々目を通していく気にはなれない。いくつかの適当に開いた資料が、目新しくなかっただけ。この中から有益なものを選び分けるなんて、容易な事では無い。

さて、どうしたもののかな・・・溜息を吐いて顔を起こし、モニターに無気力な目をやった。

今更新しいテーマを考えるのも、何となく嫌だしな。

意地というほどでもないが、以前から知りたいと思っていた事だったからだろう。

『カーティ』という親友と同じ名なのが、気にかかるっていうのもある。おまけに昔読んだ偉人伝の表紙の絵は何となく彼に似てて、何というか・・・そう、親近感みたいなものを感じる。

それに、突如現れた謎の天才ってのは、やっぱりミステリアスでいい。

彼の公での最後の言葉も謎だった。

「これでたぶん私の役目は終わりです。もうこの時代は十分堪能しました。」

そう言ったらしい。

だから色々と怪しい説が賑わったんだろうし、『役目』とか『この時代』とか、当時の俺も、まるでどこかからの使者みたいだなと思っただのを記憶している。

『パーフェクトJ』から340年。

意地や見栄で進める国家とは違い、利益を求める企業のバイタリティーは凄まじかった。

あつという間にカーティ博士の理論を実用レベルに押し上げ、採算が取れるまでに発展させた。

まずは観光に特化し、その利益で今度は宇宙空間での滞在を目的とした技術を確立し、施設を建設した・・・つまりホテルである。

その技術は下請けから洩れ次第に汎用化し、多くの企業が参加した結果、セレブ向けの高級リゾートから一介のパンピーまで利用可能

なお手軽旅行までと、多彩なものとなった。

また違う企業は、もっと遠くへ行く術を編み出し、テラフォーミング・・・つまり惑星を地球みたいに人類に適した環境に改造させる研究をしていた企業とタッグを組んで、地球から遠く離れたいくつかの惑星を人の住める場所に変えた。

それがだいたい210年前。

その頃の地球は、哀れなほど人に破壊されていた。

大気は汚れ、資源は枯渇し、地球自身も氷河期への移行を始めており、母なる惑星を見限り、未知の惑星へと希望を抱く者が多かった。かくいう俺の曾爺さんもその一人で、俺はMT-0012と呼ばれるこの惑星で生まれ育った。

MTは『Mars Type』火星に組成が似ているという意味で、『0012』は12番目にテラフォーミングされたというただの通し番号だ。先を見越して4桁も取ってあるので、まだまだ当分使用可能だろう。

しかしその名は味気なく、愛着など湧きようもないので、この星に住む者は皆『コーラル』と呼び親しんでいる。

この惑星の空の色、珊瑚のようなピンク色がその由来だ。

コーラル⇨珊瑚⇨刺胞動物門花虫綱⇨地球の青い海に住むという植物のような動物

知識ならば、調べれば得られる。

だがしかし・・・今現在ここに暮らす誰もが、海中に広がる不思議な生物である所の珊瑚を実際に見た者はいない。

酔いどれとガリレオ

「・・・あのさ、ここはお前の部屋じゃないぞ？」

寮の自分の部屋に戻ったのは午後8時。開け放たれたカーテンの向こうの空は、まだ何となく明るい。

「また更に焼けたな。赤いぞ？」

部屋は今朝のまま・・・つまり散らかったゴミはそのまま、そんな事には一切気にした様子も無く、人の布団の上に無断で転がるジエインは違う質問を返してきた。

「そりゃ、毎日天気がいいからな。・・・そういうお前は白いなー、少しは日に当たったらどうだ？」

俺とは対照的な色をしているのは、人種の差という問題だけではない。

「遠慮する。俺は頭脳労働専門だ。」

このインドア野郎・・・。

「じゃあ、いつまでも人の布団に転がってないで、お前もバイトに行ったらどうだ？ 家庭教師の時間そろそろだろう？」

「布団っていいよなー。畳めばベッドみたいに場所取らないし、少し硬い気もするけど、そこが何となく癖になるよな。」

疲労による苛つきをこらえて、心配してやってるっつのに、ジエインの返事はまたも噛み合わない。

「・・・それ、珍しいだけだろ？」

「ジャポネの文化はやっぱりいいよなー。こんなに律儀に伝統守るやつはリョータの家くらいだろう？」

「余所の家は知らねえよ。とりあえずそこだけ、俺もう疲れてへ口へ口なんだ！」

肉体労働者を甘く見るな？ おまけにレポートの資料探しに頭も使って、今布団に転がったらすぐにも寝てしまおう自信がある。

無理やりにもどかしてやろうと、足蹴にすると、

「ヒドいな、俺も結構疲れてるんだぞ。」

と抗議の声を上げるが、顔はそんな風には見えない。

ジエインは仕方無さそうに起き上がり、筋を伸ばして面倒臭そう脇には寄ったが・・・断固として布団からは降りようとしなない。なので、仕方なく座布団程度の扱いで隣に座る事にした。

「ほれほれ、かわいい生徒が待つてんだろう？」

「・・・16歳の男子高校生が、俺にとってかわいいと思うか？」
肘でつついて急かしてみても、その返事は素っ気無い。

「俺たちにもそんな時代があった・・・それを思えばかわいらしくないか？」

無論冗談だ。別に懐かしんでる訳ではない。

「4年しか経つてないのに生意気な口を利くな。じゃあ変わるか？
何なら紹介してやるぞ？ したら俺は、今度は女の子を教えられるように取り計つてもらおう。」

左腕に常備しているゴムで長い髪を括りながら、明らかに笑っている目を俺にむける。

それは困る・・・ってというか、分かってて言うな、からかうな。

俺はコイツと違って、人に要領良く教えるのは苦手だ。もちろんそんな自信も無い。

「・・・遠慮する。俺は人に教えるようなタイプじゃないって知ってるんだろ？ それより本当に時間いいのいか？」

「ああ、夏休みだから昼間に変えてくれて連絡があった。で、終わってさつき帰つて来たところだ。」

・・・それを先に言えつての。心配した分損したじゃないか。

そう思つてムスツとした顔をしていると、ジエインはにたりと笑う。
「んー、もしかして心配してくれた？ 嬉しいねえ、俺りョータに心配されちゃったよ。」

「あーもう、邪魔だつての！！ 俺はバイトで疲れてるし、レポートの資料は足りないし色々忙しいんだっ！！」

事実だが、怒鳴った理由は照れ隠しに他ならない。こいつは毎度、

こうなる事を分かってやって、笑いやがる。

「それなら、中央公文図書館にアクセスした方がいいぞ。うちの大学の資料は貧相だからな。」

俺の心からの叫びはジェインには一切届かず、さらりと流されて話題を変えられた。

くそっ、

「・・・あれはあれで膨大過ぎてよく解らん。」

「リョータは検索が下手なんだよ。端末借りるぞ?」

俺とは対照的に機嫌が良いジェインは、おもむろに立ち上がると備え付けの机に向かい端末を起動させた。

「ほら、腕貸せ。」

請われて傍に行くとは当然モニターの表示はデータの認証画面で、左腕のプレスをかざすとアクセス可能となり先に進んだ。

そっからの俺は眺めてるだけだ。

時々ピロンピロンと鳴る操作音に続き、机の上にぼんやりと浮かび上がるキーボードの上を、ものすごい速さで指が動いた。

俺はコイツのこれを、特技だと思っている。

「ほら、これでかなり絞れた。当時の記事に、彼の実際の映像、関連書籍に、まあ、まだまだ数は多いが、このくらいは頑張って目を通せ。」

「えーっ、多過ぎ・・・。」

端末を覗き込んで、リストの上に表示されたヒット数を見て溜息を吐いた。確かに俺が検索した時より遥かに数も減って、興味深そうなタイトルが並んでいるのは確かだが・・・。

「少な過ぎても、分析出来ないだろう?」

裏拳で腹を叩かれた。

「かもしれないが・・・。」

面倒だなという思いは消えない。

「そっいや、ジェインのレポートは何で書く気だ?」

「俺か?・・・俺はガリレオだ。」

何気なく話題を変えてみたが・・・ごめん、誰だっけそれ？ テキストにそんな名前があった気がするけど・・・さっぱり覚えてない。「・・・やっぱり、リョータはバカだ。」

何も喋ってないのに吹き出したジエインは、苦しそうにそれだけ言っただけ、その後盛大に笑ってくれた。

「ガリレオ・ガリレイ。地球にあったイタリアって国の大昔の学者だ。」

ジエインはビールを傾けながらそう語りだした。

結局今夜もここが酒場になってしまった。ただし、昨日と違って今日はこいつと二人つきりだ。

大昔、世界は神が創り、その地には同じく神に創られた人間が暮らした。だから世界の中心はそこで、すべてはそこを中心に回っていると考えられていた。宗教第一主義だな。

世界は地球って訳でもなく、それ以前に世界の概念も微妙で、平たい世界の果ては断崖で、星々は遙か天界から吊り下げられている・・・なんて、愉快的発想もあった時代に、ガリレオはそれは違うという認識を持ち、実験や観測を繰り返して、地球ではなく太陽の周りを他の惑星が回っている・・・という結論に至った。そして自身の理論を発表したんだ。

けどその結果、彼は教会に迫害された。

科学は人の作った御伽噺なんかと違う、人が在るから世界が在るんじゃないって、世界があつてそこに人がいるだけだつて・・・地動説どころか、太陽だつて、太陽系だつて動いてるなんて今じゃ当たり前前の事なんだがな。

審問裁判で地動説を捨てると誓約させられて、その後は軟禁状生活で、まあ生きてく上では利巧な生き方では無かつたんだろけどさ。

「それでも地球は回っている。」って、何かかっこいいだろ？

己を曲げずに、正しい事は正しいって言い切るのって、何かいいよな？

でき、時代が下って科学の時代になり、彼の正当性が認められた。そしたら教会は謝罪したんだ。350年も経って、本人はとっくの昔にいないってのにさ。それだけ彼の影響力が大きかったんだろうな。

後の世にまで引き継がれる考えと発見と、凄いやな……。

今日のこいつの舌はよく回る。

普段からよく喋るやつだが、それにも増して……喋りすぎだろう？
けど楽しそうで、俺は途中まで適当に相槌を打っていた。

……そう、途中までは。

俺は途中でつぶれて、そこからは意識が無い。

酒にはなく、眠気に勝てなかったんだ。

その手前も実は、ジエインの話よりヤツ本人に注意が行っていた。

説明する時の話し方は嫌いじゃない。そういう所がやっぱ頭がいいんだろっとな。

子供みたいに嬉しそうにしてるのも、何か見てて惹かれるんだよな。
ゴムで結べなかった顔にかかる髪を時折手で払う仕草も、コイツがやると何でサマになるんだろう？

何故だか知らんが、小さい頃から俺はこいつに気に入られてて、仲が良くて、でも俺はコイツに対して色々と羨ましいと思う事がいっぱいいて、だけど……俺はコイツが好きだから、羨んでも仕方がないと解ってる。

小暗い気持ちを抱えたまま、コイツの隣で笑ってたくは無い。心に嘘を抱く事無く、付き合っていきたい。『ジエインは凄いやツだ！』心からそう思っ……出来れば俺も、コイツからそう思われていたい。

そして……酒の勢いでこんな恥ずかしい事考えてたってのは、目

が覚めたらきれいさっぱり忘れてて欲しい。

鳴り響く電子音に無理やり起こされると、部屋には俺一人だけだった。

そして驚くべき事に、部屋の中に散乱していたゴミがきれいさっぱり消えていた。

・・・ジェイン、感謝する。

酔いどれとガリレオ（後書き）

あ、書き忘れてた。

「太陽」は太陽じゃないけど、太陽なんです。

太陽系ではなくて、他の恒星を中心とする惑星ですが、人々はやっぱり太陽と呼ぶのです。

旅の始まり

夏の休みは日常に押しつぶされ、瞬く間に過ぎ去った。

レポートの資料に目を通す事・・・はあまり捗^{はかど}っていないくて、肉体労働と、呼んでいない訪問者との酒盛りで俺の体はかなりボロボロである。

バイトの予定は昨日までで、無事その予定を終え報酬を得た。しかしそれでも、今日は疲れたと言って寝ている事は出来ない。ここで寝てしまつては、これまで何のために苦労していたのが解らなくなつてしまう。

・・・何故ならば今日は、念願の旅行に行く日なのだから。

朝9時45分に寮のロビーで待ち合わせ、傍にあるクリアチューブのステーションに歩いて向かう。

大きな荷物は宅配業の老舗も老舗、地球時代から存続するグリーン・エクスプレスに頼んで先に送つてしまったので、皆軽装である。俺もジェインは普段と変わらない格好で、これから旅立つ俺たちとその辺を歩く人たちの差など判らない。

・・・しかし、女2人は少し違い、結構気合が入っている。

大きな花が咲き少し目にまぶしい色合いの、いかにもリゾート仕様のワンピースのフユカと、モントーンのロックテイストのミレイ。余計なお世話だと言われそうだが、一見してこの組み合わせ、傍目には同じ場所に向かおうとしているとは、とてもじゃないが思えない。

それはさておき、航程はこうだ。

寮のロビーに集合

クリアチューブでエアポート

飛行機

でスターフィッシュ　　クリアチューブでトルネードゲート
トルネードカプセルでスペーススターミナル　　送迎のシップで
ホテル到着

こう羅列してみると、結構な航程かもしれない……。

クリアチューブとは、地上を行く際に利用する一般的な交通機関だ。透明で宙に浮かぶ……いやしつかり支えられてはいるんだが。真空に近い状態のパイプが張り巡らされていて、その中を列車が走り抜ける。

ここドルフィンから、この星の首都や、宇宙へ出るためのゲート乗り場があるスターフィッシュに向かうために、エアポートに向かうクリアチューブに乗り込んだ。

ちなみにドルフィンもスターフィッシュも、大陸の名前である。それにもう一つ、シエルを加えたのがこのコーラルの主な陸地だ。

珊瑚に、イルカに、ヒトデに、貝。これも見た目かららしいが、第一世代は一体どれだけ海が好きなんだ？ ……って感じだよな。

「そこ座ろう。」

張り切り過ぎてテンションの高いフカが、迷惑無視でいきなり車内を走り出すと、BOXの席を陣取った。自由席なので早い者勝ちといえはそうなのだが……ここですかさずお約束の突込みが入る。

「車内は走らない。」

ミレイがさつきキオスクで買っていた、ローズンライムソーダのカップをフカの胸元に当て、フカは声にならない悲鳴を上げた。もちろん服の上からでは無く直接だ。

……さすがミレイ、容赦が無い。

こいつの突っ込みは厳しく激しい。

そんな事より俺は、フカが胸元の広く開いた服を着ているという

事に気付いて、何となく気恥ずかしい気がしてきた。

「小学生でも知ってるような事を、大人がするんじゃないの。」
正論を吐くミレイは、それでも平然とフユカの隣に座る。

恨みがましい目で抗議するフユカと、それでも結局仲の良い2人に苦笑しながら、ジェインと俺はその正面に座ると、どちらの味方にもなる気はないとばかりに・・・その実は胸元を見ないように車窓に目をやった。向こう側はまだステーションだが、窓には案内の文字が流れている。

本日の天気は晴れ。エアポートへの到着予定時刻は10:37。

他にも、主要な街への到着予定時刻が延々と流れ続けていたが、やがてリズムカルなベルの音が響き、車両は滑るように動き出した。

景色はあっという間に市街になり、閑散とした野となり、森林帯になった。

走行中の窓には到着予定時刻の他に、ニュースも流れている。

俺はキオスクで買ったコーヒーを飲みながら、ただ流れる文字を何となく見ていた。

『太陽の表層にフレアが起こる兆候が見られるとの発表がありました。今後の動向にご注意下さい。』

時々あるこの手のニュースに、俺はふーんと思っただけだった。

それから、雑談とじゃれあいで時間は過ぎて、緑色の世界だった窓の向こうは再び人の住む世界の証が見え始めた。そろそろエアポートに到着だ。

・・・実はこここのスケジュールがおかしい。

乗り換えの都合上エアポートでは一切余裕が無いのだ。

・・・なので、クリアチューブを降りるなり皆でエアポートの搭乗口に向けて走った。

「ちよつと・・・待って、靴が・・・。」

キラキラするサンダルを履いているフユカが、脱落しそうになる。

「そんな格好してるのが悪い。ここで走る羽目になるのは判つてた
だろ？」

この部分のスケジュールを主張して、譲らなかつたのはフユカだ。
なのに当の本人がこのザマってのはどういう事だ？

寮の食堂でスケジュールを組んだ時、皆の反対を突っぱねて「早く
行きたいの！」ってごり押しした勢いはどこに行つた？

「だって、リゾートホテルだよ？ それなりの格好したいじゃない
っ！！」

・・・そんな理由は知らん。

「じゃあそれ脱いで。裸足で走ればいいんじゃない？」

我が儘にしか聞こえないフユカにとつての正当な言い分は、黒いエ
ンジニアブーツのミレイにバツサリと切り捨てられた。

「絶対嫌っ！！！」

「フユカ、やっぱりこの時間は無理があるって言つたら？ 1便ず
らしても後影響出ないんだから、大人しく次に乗ろう。」

あっさり走る事を止めて笑い出したジェインが、意地になつたミレ
イにそう提案すると、皆つられて歩を緩めた。

「だって、それじゃキャンセル料取られちゃうじゃない。」

フユカがサンダルの紐を気にしながら口を尖らせると、ジェインは
皆が驚く事を言い出した。

「大丈夫。もう事前に変更してあるから。」

「・・・は？」

ジェインに注目したまま、皆が動きを止めた。

「・・・それは、もし間に合つたら逆に乗れなかつたってオチか？」
「そういう事。」

にこやかで、楽しげな様子に俺はうんざりした・・・またこいつに
嵌められた。

気の回るジェインは、事前に色々一人で準備をしておいて、それ
をわざと寸前まで告げない。そして、こうして反応を見て楽しむ悪
い癖がある。

やる事は決して悪い事ではない。むしろ皆の事を思つての行動だ。でもな、先に行つてくれ・・・本当に疲れるから。

「次の便は何時？」

フユカと俺が頭を抱えている間に、切り替えの早いミレイが質問をした。

「1時間後の11時50分。」

・・・なら余裕じゃないか。

俺達は顔を見合せて笑い、とりあえず近くのソファに腰を下ろして一息ついた。

ピンクと数珠

嵌めてくれたジェインの親切によって、俺達は余裕で飛行機に乗り込む事が出来た。

ピンク色の海の上を飛ぶ飛行機は、何事も無く進んで行く。

・・・まあ、何かあっても困るんだが。

モーターの低くく唸る音が防音の壁を抜け、微かに響き眠気を誘う。おかげで周りはほぼ全滅だ。けど俺は何故か眠れず・・・眠いのに神経が高ぶって眠れないってやつだな。

ジンジンする脳味噌を持って余し、イヤホンを耳に突っ込んで穏やかな音楽を流しているラジオを選んだ。前のモニターにも変化の無い外の景色を映してぼんやりと眺めた。境界線のはっきりしない空と海を延々映しているだけの退屈な映像に、寝られる事を期待している。

しかし不意に、その映像に新しい色が加わった。ピンク色の世界に所々光を返す黒がフレームインしてきたのだ。

一般にブラックリボンと呼ばれているが、これは発電施設である。ずっと日の当たる場所だけを進み続け、太陽の熱をエネルギーに変換している。

海水や波に負けない特殊繊維用いた黒く長い布を、海面に広げて引きずる姿はリボンにしか見えない。

それでも映像の景色は穏やかで退屈で、おかげでようやく意識が薄れ、ほんの少しの時間だけ眠る事が出来た。・・・そう、ほんの少しだけだ。

「っ!？」

慌てて目を開けたのは、耳に嵌めたイヤホンからものすごい音が聞こえたためだ。

心臓も体も飛び跳ねて、一瞬息が止まった。

慌ててイヤホンを外すものの、急に戻ってきた意識は体の動きとはチグハグで、状況の理解がまったく出来ない。

「おはよう。」

起伏の無いミレイの声にさらに驚き、前の席にいるはずの声の主を求めると、後ろ向きで座席に顎を付いて見下ろしていた。

「・・・な、に？ もう着くのか？」

「うん、そろそろ。」

確かに前のモニターに写る映像は、海から陸に変わっている。

陸といっても人の暮らす街や、植樹された豊かな緑が広がっている訳ではなく、この星の本来の姿である赤茶けた荒野に過ぎない。

緑化もかなり進められているが、まだ手付かずの場所や、わざとそのまま残してある場所もある。この下は後者だ。航路に当たる部分なので安全のためにわざと残してあるのだ。

骨伝道のイヤホンなので、周りに音が漏れる心配は無いが、後の人の迷惑になりそうなのでボリュームを下げておこうと前のモニターを見ると、3から10に変わっていた。チャンネルも換えられている。

「・・・あのさ、次は普通に起こしてくれないかな？」

駄目元で言ってみた。

「つまんないから嫌。」

「・・・やっぱり駄目か。」

ちなみに他の二人はまだ寝てて、この後それぞれ同じような目に遭わされた。

次はゲートに向かうため、再びクリアチューブに乗り込んだ。

エアポート周辺の人類文明が次第に遠ざかると、窓の向こうは飛行機のモニターで見た赤茶けた荒野がただひたすら広がっている。

「なあこんな所に放り出されたら、どうする？」

自分がそうなつたら、どうするかなんて考えもせず口にした。何故ならそんな状況に陥るなど真つ平だからだ。

「はあ？ 突然だな。」

「俺もそう思う。ただ、外見てたら何となく怖くなつたんだ。」

もし一人でこの凶暴な自然の中に投げ出されたら、一体どうなってしまうのか？ 助けが来るまでやり過ごせるか？ もし助けも呼べなかつたら？ …俺には生き抜く才覚はあるのか？

「うん、確かにこんな所に投げ出されたくは無いやね。」

フユカは自分の肩を抱いて不安げな顔を窓の方に向けた。…だから、胸を寄せるな。気になるよその服。

「まあ、冷静でいらればどうにかなるんじゃないか？」

ジェインは動じた様子も無く、口を開いた。

「携帯があれば助けが呼べる。場所も判る。無ければ非常用の通信装置を探す。避難施設め結構点在するしな。おまけに、わざわざこんな場所で不便な生活をしている物好きもいるし。諦めなければどこかには行き当たるんじゃないか？」

やっぱりコイツの言葉は、樂觀ではなく冷静な分析なんだろう。そして何より、諦めようとはしない。

「ジェインはそういうの前向きだよな？」

「そりゃ死にたくないし。」

当然だろうとばかりにミレイに返す言葉は、おそらく生き物のすべてが持つている本能だ。だが、そのためにきちんと行動出来るヤツはそう多くない。

「昔もそう言ってたよね。ほら、地下探検の時。」

まーた懐かしい話を引っ張り出してきたな。

フユカが思い出し笑いと一緒に口にした『地下探検』とは、好奇心全開だった子供の頃の…まあつまりは失敗談だ。下手をすれば皆死んでたかもしれないくらいにはヤバイ。そんな思い出である。

きっかけは猫だ。

小3の春、学校帰りの道沿いにある水の無い排水溝に、生まれて間もない・・・ように見えた、小さな猫が落ちていた。

うずくまって弱々しく鳴くだけだったから、怪我でもしてるんじゃないかって、皆で排水溝に下りてみたら、子猫はいきなり駆け出して、後を追いかけた俺たちは・・・見事に迷子になった。

俺が懐中電灯なんか持ってたのが悪かったんだ。

もしものために！　なんて、子供特有の意味不明さで常備しててさ、もしもの使い方が思いつきり間違ってたんだ。

結局途中から子猫なんかどうでもよくなつて、「地下探検だ！」とか言つて、調子に乗つて暗く入り組んだ管の中をもともせずに進んで、変化の無い状況に飽きて、帰ろうとした時にはどっちに行つていいのか判らなくなつていた。

人が入る事を想定もしていない場所では携帯が繋がる訳もなく、皆パニックに陥る中・・・ジェインだけは一人冷静だった。

俺から懐中電灯を奪い取ると足元を照らし、

「みんな、泣いてないで着いて来い。俺は死にたくないからここから出る！」

つて、心強い言葉をくれた。

用心深く来た時の足跡の痕跡を探り、通った道筋の記憶を辿つて無事に生還する事が出来た。

そう、まさしく命の恩人だ。

管の底に少しだけ土があつたのが不幸中の幸いだった。と、当時のジェインは言っていたが、ヤツ以外はそんな事にまったく気付いてさええなかった。

「まったく、命の恩人様々だよ。」

俺がそう言つて隣のジェインを拝むと、

「丸いのが足りないぞ？」

と、一瞬間の中を疑問符が飛び交うような事を言つてくれた。

「ほら、ちっちゃい丸いのがいっぱい繋がってる輪つか。」

「・・・ひよつとして、数珠の事か？」

「あれは仏に祈る時の道具だから、お前が仏になったらしっかり手に嵌めて拜んでやるよ。」

一般にジャポネの文化は、エキゾチックだと重宝されて愛好者は多い。しかし、所詮はファッション感覚なので、正しく理解している者は稀である。

ジエインもジャポネの文化が大好きで、半端に色々と知っていたりするのだが・・・惜しいかな、微妙に何かズレている。

「人が仏になれるのか？」

だが今日は、なかなかいい所を突いてくる。

「ああ、死んだらな。そして仏のいる極楽浄土って世界に行って、仏の仲間になるんだ。」

善行を積んでいないと行けないとか、そうでなければ地獄行きだとか、そもそもそんな世界があるのかって事は、面倒なので割愛する。

「・・・じゃあいい。俺まだ当分生きるつもりだから。」

眉を顰めるジエインの様子に、俺とフユカは吹きだし、ミレイは不思議そうな顔を向けた。

ピンクの惑星と青い映像

大昔の人類は、見上げる空の向こうに神の世界や死後の世界を夢想した。

340年前の人類は、空から更に抜け出すために、莫大な労力と資金をかけた。

そして今俺たちは、トルネード・カプセルの定期便に乗って、楽々と惑星の大気を抜けた。

ゲートから宇宙空間を漂うスペーススターミナルに向かうには、トルネード・カプセルという装置を利用する。

逆を言えば、地上から宇宙へ飛び出すためにはこれを利用するしかない。

空気を射出して空気に渦……つまり竜巻を作り出し、上昇気流を利用し、さらに空気を吹き飛ばして軽くなった中心部分を、カプセルと呼ばれる乗り物で進む。

……らしい。

いやほら、違う分野を学ぶ一学生にはこのくらいの認識しかないんだって、飛行機が飛ぶのに航空力学を利用するのは知ってても、航空力学についてはさっぱりだったり。物を動かすのにモーターを利用するのを知ってても、モーターの内部構造については良く知らないとか……そんなもんだ。

あるいはジェインなら、スラスラと語ってくれそうな気もするけどさ……勘弁して下さい。俺とアイツは、そもそも頭の出来が違うんだよ。

強度や耐熱の問題でカプセルに窓は付いてないが、中央に設置されたモニターには外部の状況を表示している。

……こういうのはデフォルトなのだろうか？

まあ、自分がどういふ状況にあるのか分からないというのは不安で

あるから、外が見えた方が安心といえば、そうなのだろう。

段々と離れて行く生まれ育った惑星は、ピンクの中に赤い地表が浮かび、所々に黒や白やその他の色が雑多に交じり合う人の住む世界が存在する。

極に浮かぶ氷は薄っすらと青を含む白で、暖色系ばかりの中で唯一異彩を放っている。

白い雲を突き抜けて、外の色はピンクから紫そして段々紺色へ変化し、やがて宇宙の闇へと色を変える。

なーんて、情緒たっぷりな事を並べてみたが、俺がこの景色を見るのは4度目だ。

子供の頃に3度、家族の旅行で宇宙に出た。

その時は普通のホテルで、他の惑星を見に行くツアーに参加して、それと宇宙空間で遊泳をした。あの上も下も無い違和感だらけの感覚は不思議で楽しい。

ふと周りを見ればフユカはまた眠りこけていて、ジェインはシートを倒して本を広げていた。

・・・そう本だ。

ビューアーで見るデータではなく紙で出来た昔ながらの、しかも古めかしく変色した本だ。背には『ガリレオ・ガリレイの生涯』とある。

・・・なるほど。コイツもレポートのために資料を読んだな。そしてミレイは何故か真剣にモニターを見ていた。これはよく意味が分からない。

「何でそんなに真剣に見てんだ？」

傍に寄って声をかけた。

別にこの映像は珍しい光景ではない。・・・逆に、こんなに食い入ったように何かを見つめるミレイの方が珍しい。彼女は普段こんなに必死にはならない。

もしもこの映像が見たいのなら、端末で探せば簡単に出てくる・・・

もちろん俺にだって簡単に探せるぞ？

それより、ミレイがそんなに宇宙に関心を持っているとは思って
いなかった。

「パーフェクト」のおかげで、今私たちはこうしてここにいるんだ
よなつて、考えてたの。」

「・・・はあ。」

ここでその名が出てくるとは思わなかった。

「何でそんな事考えてるんだ？」

彼女もレポートのテーマにそれを選んだんだろうか？

「気になる事があるから・・・リョータはそれでレポート書く
でしょ？ ホテル着いたら時間くれる？ 私の考察に意見を頂戴。」
私の考察って何だ？

「あ、ああ、いいけど。」

「じゃあ、後で呼ぶから。」

いつになく積極的なミレイの態度と物言いにタジタジの俺は、よく
考える余裕も無く、あっさりと承諾してしまった。

スペーススターミナルからは、ホテルの所有する送迎シップを利用す
る。

宇宙にたくさん存在するホテルは、衛星と同じようにコーラルの軌
道上を周回している。だから、いちいちレーダーで調べないと所在
が解らない場所に向かうより、やはり各ホテルの送迎を利用した方
が楽でいい。

コーラルを横目に見る位置をしばらく行くと、光りの漏れる大きな
白い球体が見えてきた。あれが目的のホテルだ。

宇宙空間では球体が一番安定するという事で、宇宙に浮かぶ物の中
ではメジャーな形である。ああいうのは大体入り口が基底部にあり、
俺たちの乗る送迎シップもそこに吸い込まれるようにして収納され
た。

シップが完全に動きを止めると、前方左のプラグドアが開いた。

笑顔を張り付かせた送迎シッポの添乗員に促されるまま、出口からそのまま繋がる通路を進みエレベーターに乗り込んで上昇すると、開いた扉の向こうに煌びやかなロビーが広がっていた。

ブラウン基調の落ち着いた色合いの中で、複数のシャンデリアが乱反射の光を撒き散らし、壁や柱の装飾を魅力的に照らし出している。装飾の施された手すりのある螺旋の階段の傍には噴水があり、そこに浮かぶクリスタルの島に置かれた黒いグランドピアノは、無人のまま何かの曲を奏でていた。

・・・正直、俺は場違いな気分がして居心地が悪い。眩しい光から目を逸らすと、反対側はひたすらに宇宙空間で・・・しかしそれだけだと威圧感があるためだろう、その手前には地球上の光景をホログラフにして映し出している。

もちろん実際にはこんな景色を見た事が無いが、資料映像で見たから地球だという事は判る。

青い海の中を泳ぎ回る無数の魚の群れ、赤い太陽の前を歩く動物のシルエツト、ひたすらに青い空を流れ続ける白い雲。

第一世代なら郷愁を誘われるのだろうが、後の世代の俺たちには神秘の映像だ。

コーラルピンクの空と海も、それなりにきれいではある。しかしこの色には適わない。

俺が住む惑星の海には養殖以外の魚は居らず、地上にも家畜や愛玩用の生き物しか以外存在しない。

所詮あの星は加工品なのだ。

一部貨物に紛れ込んで、我が物顔にテリトリーを広げているヤツらもいるが、そういうのは害虫や害獣と呼ばれている。

『奇跡の星』か・・・青く美しい海の景色に思わず見とれた。

「リョータ、何してんの？ 早くチェックインしようよ。」

しかし、そんな俺の心の内など知る由も無いフユカは、さっさとフロントに向かいチェックインの手続きを始め、物思いに浸る俺を呼

んだ。

急に現実に引き戻されて何とも言えない気分だが、怒るような事でもない。

「はいはい。今行くよ。」

そう答えて皆がいるフロントに向かおうとすると、更にフユカに急かされた。

「早くつ、私色々見たいんだからね！」

彼女はいつもこんな感じだが、今日は更にテンションが高い。

何となく不自然な気がして、気になると言えば気になるが・・・旅行中だからだろうと勝手に想像して納得しておいた。

数あるホテルの中から、「絶対にここがいい！」と旅行ガイドを表示して主張したのは彼女である。理由は特に聞いていないが、別の案があるわけでもないのであっさり承認され、その後も問い質す事は無かった。

だから、それ故に期待が大きく、嬉しくて仕方がないのだろう。

ホテルマンに案内された部屋は、広い空間だった。

色合いはモノトーン。ジャポネの文化を取り入れたデザインで、パーティションとして障子や格子が利用されている。

宇宙空間を臨む窓際には、イス代わりのような畳敷きのスペースがあり、黒地に蓮の刺繍をした丸い座布団が置かれている。

黒檀のような床には、羊歯したみみたいな葉を持つ、白から赤へのグラデーションの細い糸みたいなのがいっぱいいな・・・俺は知らない花の絵のラグが敷かれ、色の少ない室内を色鮮やかに飾り立てている。

大きなモニターの前には、いくらするのも判らない、スタイリッシュなでっかい白のソファが置かれ、その前にはチャコールグレーの色をした、総強化クリスタルガラスのテーブルがある。足の部分にきれいな細工がされていて、これも一体いくらするのやら・・・。寝室は2つ。それぞれにセミダブルのベッドが2つ置かれ、バスルームやパウダールームもそれぞれに付き・・・さすがスイートだ。

大はしゃぎのフユカと興味深そうなミレイはさっそく部屋の探検に行き、ジャポネの文化大好きのジェインは、畳の上に転がってその感触を満喫している。

・・・結局俺だけか？　こんなに居心地が悪い気分がして、少々腰が引き気味なのは？

つくづく俺は小市民だなと苦笑してソファに座り、モニターの電源を入れ、ちょうどやっていたニュース番組を何となく眺めた。

『・・・フレアによる衝撃波に注意してください。サファイア付近の一部の宙域で航行が制限されますので、航行予定のある方はかならず宇宙航行局の発表を確認するようにして下さい。次に磁気嵐の影響ですが、コーラルに影響は無い模様です。えー、次はコーラル各地の天気予報です・・・』

フレアのニュースは予測から事後に進行していた。

方向的にサファイア付近つてのが痛い、たぶん3日もあれば治まるだろう。

予定的にはギリギリかな・・・なんて考えていたのだが、そもそも疲労と、移動疲れとで、そのままウトウトと寝てしまっていたらしい。

そして・・・ハイテンションの友人たちに・・・思い出したくも無い起こし方をされた。

ピンクの惑星と青い映像（後書き）

トルネードカプセルの仕組みには、突っ込まないで下さい（^^）；

ラグの花は、ネムノキです。

カオステイックな考察

まだ少々不貞腐れ気味のフユカが、目の前でケーキを頼張っている。予約していたレストランでの夕飯が期待外れで、気分治しにもう1件、カフェスペースに寄りました・・・という所なのだが、食べるだけ食べて腹の減っていない俺たちはドリンクのみで、それがさらに気に入らないフユカは「付き合いが悪い」と、さらにへそを曲げている。

しかしそれも、美味しいケーキのおかげで幾分マシにはなった。

「何でお肉で頼んでたはずなのに、お魚が出てくるのよ？ ジェイン、ここでも何か変更してたの？」

愚痴をこぼしていたフユカは、ショートケーキにフォークを刺したまま、睨むような目で前科のあるジェインを見る。

「それ濡れ衣。俺は何もしてないよ、どうせどっかで注文が間違ってたんだろ？」

嫌疑をかけられたジェインは、ホットコーヒーを手にしてさらりとかわす。

という事で、俺たちには不満は無い。あるのはフユカ一人だけだ。やはり期待が大きい分、外れた時の反動も大きいものが、珍しくグズグズと後を引いている。

「じゃあ後は疑わしいジェインに任せて・・・リョータ付いて来て。」

紅茶を空にしたミレイが、スツと立ち上がり俺を呼んだ。

おそらく時間を頂戴と言った『パーフェクトJ』の件だろう。

「俺は無実で疑わしくなんかないから。それよりリョータを御指名つて、そっちの方が疑わしくないか？」

「何が？ レポートの事で話があるだけよ。」

表情も変えずにイスを戻すマイペース・クイーンのミレイには、何を言っても無駄だろう。「行きましよう」という誘いの声を残して

さっさと一人で歩き出してしまった。

振り回される事に多少の迷いはあったものの、機嫌の悪い女の子はそれ以上に面倒臭い。心の中の天秤はあっさりともれいに傾き、これは良い口実だなど、ジェインに心無いエールを送る事にした。

「じゃ、そういう事で。フユカの事は頼んだ！」

「あ、おい……。」

「何よ二人とも、その言い方は!？」

さらに機嫌を損ねるフユカには触れないようにして、弱るジェインに『頑張れ。』と目で告げて、後ろを気にしもせずに先を行くミレイを追いかけた。

「で、結局考察って何？」

最上階のラウンジに連れて行かれ、カクテルを注文するミレイにつられて、俺もビールを頼んだ。

窓の向こうは宇宙空間で、下を覗けばきれいな青を湛えたプールが複数見える。

水の色が青いのはレイリー散乱のせいだと理解しているが、その常識の通じないコーラルで育った身としては、やはり物珍しい気分になる。

「ねえ『パーフェクト』のカーティ博士のフルネーム知ってる？」

「んあ？ いや……突然何？」

そう答えると、眉を顰^{しか}め、

「レポートのテーマなんですよ？」

と、呆れた声を出しながら、前に置かれた端末を操作し始めた。

ここには自由に使える端末が置かれており、ミレイはネットワークストレージにアクセスすると、認証プレスをスキャンして自分のデータを呼び出した。

「確かにそうではあるんだけど……進んでなくて。ジェインが良さそうなの見つくるってくれたけど……それもボチボチしか読ん

でなくて・・・さ。」

頭を掻きながら言い訳をすると、きつい一言を浴びせられた。

「役立たず?」

「・・・酷い言い草だな。今日のためにバイト必死に頑張ってたんだって、ボロボロになつてたの知ってたんだろ?」

半分酒のせいである事は、もちろん言わない。

仕方なくもう一台の端末を引き寄せ、俺も自分のストレージにアクセスし、ジェインが用意してくれたリストを呼び出した。

俺のレポートが進んでいないのは、実はこのリストに安心しているというせいもある。これを読んで、見て、後は纏めればいいだけだという安心感だ。

おそらく纏めるのが一番の大仕事なのだが・・・そこは今考えないようにしている。

「・・・かもしれないけど、じゃあ聞いて。ジェイン・ガリレオ・カーティ。ねえ、どう思う?」

「どうって、ほとんどジェインと一緒だな。」

しかもミドルネームにガリレオって、カプセルでジェインが読んでいた姿を思い出して思わず笑った。そういえば、酒飲みながらも熱く語っていた事もある。

ミレイは画質の荒い昔のニュース動画を再生し、俺のほうに向けて無言で見ると促すので、グラスのビールをチビチビやりながら、仕方なくそれを眺めた。

その動画の2Dのカーティ博士は、宇宙に出る事の有用性について語っていた。

たしかこの時代は、技術的には停滞期とされている。

人々は枯渇してゆく鉱物資源に変わる新たな技術を見出せず、仕方なくちびちびと使い続けてやり過ぎし、おまけに人類が自ら汚した地球に異常気象という報復を受けていたらしい。汚れた大気により気温が上昇し、想定外の雨量や、足りない水、気温の変化等により、

それまでの作物がまともに育たず、食料事情は混乱した。さらにその後は氷期と間氷期の境目に入り、ますます環境は激変し悪化した。

そんな時代だから、母なる星を捨ててでも、宇宙に出る必要があるのだという主張だ。

「ね、似てるでしょ？」

熱弁する姿は確かにジェインによく似ている。しかし今のジェインより少々年嵩である・・・が、声に関しては同一にしか聞こえない。「ああ、うん。確かにそう思うけど、でもこれ過去の人間だし。実はジェインの先祖とかって話か？」

なら、俺に確認するような事じゃないだろう？

「それは本人に否定された。」

・・・何だよ、もう確認したのか。

「じゃあこれ。」

次に再生された動画はテレビ討論会のようで、次々に浴びせられる厳しい口調の質問を、涼しい顔で論破していた。

「癖も一緒よ。」

確かに時折髪を掻き上げる仕草は同じに見えるが・・・、

「それは単に、長い髪が邪魔なだけじゃないのか？」

俺の否定的な意見にミレイは何も答えず、次の動画を再生する。

それは腕時計のCMらしくて、アップになった文字盤がなるほど地球だなと思わせた。

12までしか無いのがその証拠だ。

自転にかかる時間は各惑星によって違い、一日の長さは異なる。

その昔、一日の長さを決めるため色々と話し合われ、24時間制を推す意見もあったが、昼夜を無視するのは混乱を生じる虞おそれがあると、各惑星の自転周期に任せるという結論に至った。

よって、コーラルの一日は28時間である。

ちなみに、色々な惑星の人間が利用する宇宙空間に存在する施設では、24時間制を採っている。

「これ、何かのメッセージのような気がするの。」

腕時計から引いたカメラはカーティ博士の全身を映す。傍にあるガラスの向こうには男1女2の3人の人間が楽しげに談笑をしている姿があるが、彼には一向に気付かない。

そして、彼が手を伸ばすとガラスが砕け、スローで落ちる鏡面化したガラスに憂い顔の彼の姿が映る。

『未来へ繋がる時を……。』

暗転した画面で女の声が響き、映像は終わった。

「これ、寂しそうな表情が話題になって、女性にもすごい人気だったらしいんだけど。でも……。これはカーティ博士の見た悪夢が元になってるんだって。で、ここにその取材記事があるの。」

次に表示されたのは雑誌の記事で、ソファで取材に応じる大きな博士の写真と、たくさんの文字が並んでいた。

大きく目を引く見出しには『実は私が見た嫌な夢なんですよ』とあり、『スタッフも人が悪いですよね、人の悪夢をそのままCMにしてしまうんですから。』と、記事は続いていた。

「ね、リョータ……。どういう事だと思う？」

「……。どういう事って言われても、俺は言葉に詰まった。」

ミレイの言わんとしている事は理解できるが、それはあまりにも突拍子が無い。

博士は明らかに過去の人間で、ジェインはこの時代にいて、いくら声や姿が似ていようと同一人物では有り得ない。

コールドスリープで自身の時を止めて未来に甦る術ならあるが、未だ過去に行く手段などは無く、それは話の世界だけの特権である。

「俺の結論は他人の空似。もう少しファンタジックにしていいたら、生まれ変わりってくらいだろうな。」

背もたれにふんぞり返って腕を組み、これ以上荒唐無稽な話を続ける気は無いという態度を示した……つもりだったのだが、ミレイを見ると「……生まれ変わり……か、」と呟いていて黙りこんでしまった。

「……まさか、もしかしてそれで納得してるのか？」

似てるのは何とか説明つくかもしれないが、意味深なCMにはまったく関係無いぞ？

「ミレイ……ひょっとして生まれ変わりの案が採用されてたりするの？」

ミレイはふと気付いた感じで、俺の方を向くと、

「うん、その発想は悪くないかなって思う。」

そう言っつて、早速端末で輪廻転生について調べ始めてしまった。

いやいやいや、輪廻転生なんか科学的に証明されてないから。

……と、言っつてもどうせ無駄だろう。

タイムワープと輪廻転生、どっちもどっちだが……納得いくまで調べたら、また何かアクションがあるんだろう。

真剣なミレイを横目に、些ちかか温ぬくんだ残りのビールを一気に煽り、端末の履歴をクリアして終了させた。

「じゃあ俺、部屋戻るから。」

「うん、ありがとう。この考察が纏まったら、また意見を頂戴。」

突っ込みたくなるほど真剣な姿に、別に返事なんか期待していなかったんで、きちんと返事が返っつてきて逆に驚いた。

そして、やっぱりまた聞かされるんだなと苦笑が漏れた。

「はいはい。」

さて、次はどんな話になるのやら……仏やヒンズーの神の名が飛び交われても困るんだがな。いくら家が仏教徒でも、俺はまったく詳しくないっての。

サケと会話と水着

部屋に戻ると強化クリスタルガラスのテーブルに、緑色の空の瓶が2本立っていて、空のグラスが一つと、微妙に気泡の上がる金の液体が半ばまで入ったグラスが1つ、それと何かのつまみが載っていたであろう皿が残されているだけだった。

このスパークリングワインの空き瓶からでは、消費した比率は判らないが・・・これまでの経験上、たぶんジェインの方が多いんだろうなと予測をつけた。

しかし、ここには2人の姿が無い。

・・・まさかもう寝たとか？

酒が入って、おまけに4時間の差が感覚を狂わすのは事実だが・・・まだ11時にもなっていない。

だがそれはただの杞憂で、探すまでもなく寝室に向かうとジェインがベッドに転がって本を読んでいた。

「何だ、やっぱり起きてたのか。」

サイドテーブルには透明の液体が入ったグラスが置かれているが、あれは水ではないな。その証拠に、グラスの隣には淡い青色をした瓶があり、『純米吟醸』と書かれたラベルが張っている。

・・・どれだけ飲む気だ？

ジェインは読んでいたページに琴しおひを挟んで起き上がると、気持ちの悪い事を言出した。

「もちろん・・・こんな場所で一人寝なんて寂しいマネが出来るか？」

物憂げな様子で、しかし力の強い誘うような目で・・・それ同性の俺でも赤くなるから。

「だから、その手の冗談は止めろって、酔っ払い！」

鳥肌の立った腕を擦ると、ジェインは笑い出した。

「リョータは良い反応するから面白いんだ。」

あーもう、また俺からかわれてるよ？

「けどこれ、乗ってこられると俺も困るんだよな。」

ジェインは笑いが止まらず、俺にとつて有益な情報まで暴露する。

「捨て身になつてまで、んな事すんなよ……。」

じゃあ次の機会には乗ってしまえばいいのか……と、分かった所で気は乗らない。

「大丈夫、馬鹿正直なりヨータはやらないから。」

「……俺、信用あるんだな。」

しかし、まったく嬉しくない。

「もちろん、だから親友なんだ。」

今までの話のどこに『だから』に掛かるのかさっぱりもって解らず、問い質したかったのだが、アルコールの魔力がプラスされたジェインの微笑にドギマギしてタイミングを逃し、無常にも話題は次に移つてしまった。

「それよりミレイと何の相談だったんだ？」

ジェインは本をサイドテーブルに置き、その代わりにサケのグラスを手にして、ベッドの背にもたれて楽そうな姿勢をとると、さつきまでの俺の事を探りだした。

「ああ……どう説明すればいいのかな？」

上手い表現は無いかと考えながら、備え付けのサイドボードから出したグラスにサケを注ぎ、その常温の液体を一口含んだ。すると仄かな甘さが広がり、おまけに鼻に抜けた香りは豊かで、これは当たり前だと改めて瓶のラベルに目をやった。

「そうだな、パーフェクトJの未来人説を推す……その考察？」

空いているベッドに腰を下ろしてもう一口飲み込んだ後、一旦グラスを置いて寝転がった。

さすがスイートだけあって、ベッドもよく弾む。

「……なるほど、諦めてないのか。」

納得した声は苦笑交じりで、既にジェインもあの考察を聞かされていたらしい。

「今度は、生まれ変わりをベースとした理論を組み立てるんだろうよ。」

「それはまた、オカルトな方向に走ったな。」
俺の説明で、飲みかけたサケを吹き出しそうになったジェインを見て、少し胸がスツとした。

「返答に困って冗談で言ったんだけど、悪くない説だって本気にされた。」

「それはそれは、次はどんな推論を立ててくるか、少し楽しみだな。」

「頻り^{ひしき}2人で笑い・・・笑い終わると、何となく気まずい空気に支配された。」

「・・・まあ、あの映像がお前に似てるってのは否定しない。」
実の所、未来のジェインを見てるような気がした。

「・・・それは俺もだ。同じ名前に興味が湧いて、昔調べた事があるんだ。大きくなるとますます似てきて、声変わりすると気持ち悪いほど同じで・・・髪型同じだと瓜二つだろ？」

後ろの結び目に手をやって、髪を摘んで揺らしながらニヤリとする。

「ひよつとして、そのために髪伸ばしてたのか？」

「そ、あまりに似過ぎてて気持ち悪いけど、それだけに興味もあるんだ。」

思わぬ所で、謎が解けてしまった。

「・・・そっか、そうかもしれないな。」

しかし、あまりにも不確定なことばかりで、推論も危ういこの話題は続ける言葉が浮かばない。世の中には自分に似た人間が3人いると言うが、これはその1つなのだろうか？

今の所俺は、自分にそっくりなヤツに出会った事はない。

けど、もしそんなヤツが目の前に現れたら、どんな気分がするんだろう？ コイツは、今までどう思ってきたんだろう？

・・・ジェインの心中を察して、何かしんみりしてしまった。

「まあ、頭では負けないつもりでいるけどな。」

しかし、横から聞こえた予想もつかない発言に、別の意味で俺は言葉を失う。

希代の天才、パーフェクトJに頭脳で勝つだと？

ほんのり赤い顔をして、ご機嫌にグラスを揺らす酔っ払いの発言ではあるが、それにしても大胆不敵な事をさらりと……。だから今度は俺があっさり話題を変えてやった。どうせ続けるにも辛い。

「……で、そっちは？ フユカの方はどうなった？」

「スルーかよ。……彼女は失恋の愚痴を熱弁して、飲むだけ飲んでつぶれたよ。」

「なんだ、また振られたのか。」

それで今日はあんなに機嫌が悪かったんだな、なるほど……。納得した。

フユカの彼氏は見かけるたびに相手が違うような気がする。

しかも振ったという話は聞かないが、振られたというのはよく耳にする。

……あの強気でわがままな性格が災いしてるのかもしれないが、そんな事を彼女に言うのと怒り出すのは火を見るより明らかなので、真偽の確認はした事がない。

しかしその都度荒れて、誰かが愚痴に付きあう事になる。

面倒だと思わない訳ではないが、これも友人の役目だろう。

しかし、振られ続けるというのもすごいが、それにも増して次の彼氏があっさり出来るといふ所に、実は感心していたりする。

「だから向こうの部屋に転がしといた。」

「……そりゃ、お疲れさん。」

でも吐き出すだけ出した後は、気持ち切り替えるのが早いのか、あるいは無理をしているのものが、とりあえず表面上は元に戻る。

まあいつもの事だな。……と、俺はそんな風にしか考えなかった。

翌日。

夜遅くまで話し込んでた俺たちと違い、早々に潰れたフユカは一人で元気だった。

水着もやる気満々な赤のビキニで、一体何を挑発する気だ？

ミレイはこれまた対照的に白いワンピースで、コイツら実は相談して逆の物を選んできたんじゃないかと思いたくなる。

その彼女も、いつまで輪廻転生について学習していたのか知らないが、俺たち同様に眠そうで・・・それでも全員水着にパーカー羽織ってプールサイドに集まったのは、フユカの活躍があつての事だろう。。

リズムカルでトロピカルな曲の流れる、熱帯をイメージしたご機嫌な場所には、多くの男女が仲睦まじい姿を恥ずかしげもなく晒していて、見ている方が照れる。

視線を逸らして青いプールに目をやれば、張られた水が揺れるたびに照明の光を色々な方向に弾き飛ばして、とてもきれいだった。そのこのサマーベッドに転がって水面を眺め、そのうちに眠ってしまった。・・・それが今の俺の希望だったりするのだが、それは叶うはずも無い。

「どうせこの二人は動かないから、色々回るわよりヨータ。」

フユカから直々の指名を受けて、今日の俺はこのまま連れ回される事が決定した。

俺が転がりたかったサマーベッドには、ジェインとミレイが優雅に転がり、人事のように爽やかに手を振る。

・・・まあ、確かに人事なんだがな。

昨日はジェインに押し付けてしまった事もあり、そもそもインドア派の二人をプール遊びに連れまわすのは所詮無理だと、フユカも俺も経験上よく知っている。

「・・・了解。」

どうせそれしか答えが無いんだ。・・・無駄な抵抗はしないよ。

ウォーターライダーは楽しい。流れるプールも波のプールも楽しい。俺にしてみれば童心に戻る思いだ。

しかし、

「フユカ、そろそろ休まないか？何か飲もう。」

バイトのおかげで基礎体力が向上し、多少の寝不足などそれほど問題にはならないが、フユカの方が気になる。

昨夜は大分ガス抜きが出来たんじゃないかと期待してたんだが、連れ回されて違うと感じた。彼女も表面上は楽しそうなのだが、テンションが高いのが逆に不自然で、俺には自棄になっているようにしか見えなかった。

プールの端にあるバーカウンターで、ライムソーダとレモンスカッシュを頼んで手近なプールの端に座り、足だけを水に浸した。「確かに疲れたかも。」

そう言うわりにはしっかり足を動かして、水飛沫を上げて遊び、非常に元気そうで・・・ある意味迷惑だ。

「こら、散らすな！ソーダに入る。」

「えー、じゃあもつとやる。」

「おい、自分のにも入るぞ？」

・・・これ放っておいても、自力で立ち直るんじゃないか？

無邪気に足をバタつかせているのを見て、何か意気込んでいた気分が萎えた・・・。

いやいや、そういう訳にもいかない！

楽しい旅行を楽しく過ごさず、悔いを残すのは間違っている。

そう思い直して口を開こうとしたら、少し離れた場所で歓声が上がった。

「あれ何だろ？リョータ言ってみよう。」

フユカはあっさり興味の向かう先を変え、返事も待たずに水からす

るりと足を抜くと、賑わいの中心部を目指て歩き始めた。

その途中で「もう、早くしてよ！」と、置いていかずに俺を急かすのを忘れないのは、ありがたいのか何なのか・・・いや、もういい。俺は完全に気力が萎えた。

多少元気が無ろうが、たとえ空回り気味だろうが、これだけ人を振り回せるなら上等だろう。

ひとつ溜息を落とした後、水が散って本当に水玉模様になってしまった残念なパーカーに袖を通し、諦めて彼女の後を追った。

サケと会話と水着（後書き）

実は共通言語は英語がベースってイメージがありまして、それで日本酒を「サケ」という表現にしております。

代用品の心理

人が群がる中心にはスロットマシンの前で立ち尽くす女性があり、そのスロットマシンは大量のメダルを吐き出していた。運が良い事に、あの女性はたった今大金を手にしたようだ。

「じゃ、私たちもこつちで遊びましょうか？」

・・・そう言うと思った。

ジーっとその様子を眺めていたフユカは、少し先の自分に希望を抱いて目を輝かせている。

しかし、人生そんなに都合良く行くものではない。俺はフユカと違ってちゃんと逆の事も考えている。

「俺に元手は無い。」

汗水垂らして稼いだ金を、ここであっさり摩すってしまうのは悲し過ぎる。

「えー、注ぎ込む前に切り上げてさ、少しだけやってみようよ。」

そう言っつて安易に手を出して、皆マシンやディーラーに巻き上げられるんだ。

「嫌だ。どうせなら他の事に使いたい。」

「ねえ、だったら増やしてみようよ？」

「そう言うヤツは大体減るんだ。」

「ケチ、意地悪、守銭奴。」

「・・・何とでも言え。」

「ねえ、」

「俺はしない。」

頑固なフユカに背を向けて、プールに戻るために歩き出すと、突然必死な叫びが上がった。

「リョータ、遊ぼうっ！！」

懐かしい言葉を聞いたなと振り向くと、フユカは少し涙を滲ませていた。

涙って・・・こんな事でそんな武器使うなよ。
涙と言っても、我が俣が通らなかつた事による、悔し涙のような気がするのだが・・・結局、俺はこの顔に折れた。

「ねえ、あれ買って。」

「何で？」

「だって、リョータは少し儲かつたじゃない。」

嵌り^{はま}そうになるフユカをセーブしながら、俺たちはカジノエリアをぐるりと巡った。その成果はまずまずで、俺は少々プラスになった。一方フユカは少しのマイナスである。

そして彼女は悔しそうな様子を隠しもせず、シヨッピングエリアに俺を引つ張って行き・・・あの台詞である。

あれと言うのは、赤い石の嵌ったネックレスで・・・絶対に良心的な価格ではない。

「俺が買う理由は無いだろ？」

「えーだって、欲しいし。」

そんな理由が通るかっ！

「・・・彼氏に買ってもらえ、どうせそのうちまた出来んだろ？」

つい本音が出た直後、フユカはキツと俺を睨み付けた。

「今そんな話出さないでよ！」

確かにそうかもしれないが・・・もう遅い。どうせ引つ込みがつかないのなら、もうこの際だから押し出してしまえ。と、俺は腕を組んで向き直った。

「お前テンション変に高くてさ、無理やり騒いでる感じで・・・何か痛々しい。もっと普通にしてくるよ。」

「・・・仕方ないじゃない、振られたんだから！」

おー、予想外の反撃に遭い驚いてるな。何か俺、面白くなってきたくもしれない。

「仕方がないかもしれないが、周りが気を使うんだ。・・・お前さ、俺だからってんじゃないやなくて、いつもこの調子なんだろ？ 相手の事考えないで今日みたいに振り回してさ。だったら振られて当然だな。」

「なっ!? 何よ、偉そうな事言って・・・。」

「俺はお前の友達だけど、彼氏じゃねえつての。・・・分かるか？ 遊ぶ連れにはなるけど、恋人ごっこは御免だね。」

カジノで遊んでる途中、腕を絡めてきては、ふと気づいて慌てて離れるというのが何度かあった。

俺を誰かの変わりにしたがつているのかもしれないし、癖と言えば癖かもしれない。

が・・・この手の癖は困りものだよな。俺じゃなければ勘違いするぞ？

そう、勘違いさせるのは罪な事で・・・ひょっとして、これであっさり次が出来るのか？

「ごっごっごっ・・・。」

俺の感じていた事は凶星だったのか、赤い顔を慌てて背け、そのまま黙り込んでしまった。

・・・さすがに調子に乗って言い過ぎたか？

「あー、フユカ？」

「仕方ないじゃない・・・ここ来たかったんだもの。」

ごめん、それだけではまったく話が繋がらない。

「ごっごっごっ、今いるこのホテルがどうした？」

「リアンと来る筈だったの!・・・でもその前に振られちゃったから。・・・でもここには来てみたかったから・・・。」

リアンとはもちろん元彼の名前だ。同じ大学の学生なので知らない訳でもないが。親しい仲でもない。

だからここがいいって、あんなに主張してたって訳だな。

・・・理由も原因も、判明してみれば単純なものだ。

溜息を一つ落として、組んでいた腕を解いた。

「別に理由はどうでもいいんだけどさ、せつかく来たんだから楽しみめば？ 意地になってもしんどいだけだろうし、そんなお前に振り回されるの俺イヤだから。」

正直疲れる・・・そう、今みたいに精神的に。

「・・・ごめん。」

いいたい事を言わせてもらった俺に対し、フユカはしおらしく謝るが、俺はそんな事を求めちゃいない。

「別に謝んなくていいからさ、こっから改めて楽しめ。」

そう言つて、肩を2度軽く叩くと、

「言われなくても、ちゃんと楽しむわよ。」

と、手形が付きそうなほど背中を叩かれ、一瞬息が止まった。

・・・照れ隠しにしちゃキツイぞ、お前？

「じゃあ、ミレイとジェインも誘つて、あっちのゲームエリアに行きましょう。インドアにはインドアで、文句なんか言わせないんだから。」

まだ『空』という字が完全に外れた訳ではなさそうだが、元気ではある。

そして、何より囚われるのは止めたらしい。

・・・あの2人まで引きずり回す気満々なのはどうかとは思つが、負荷が分散されるのは歓迎すべき事かなと、あえてコメントは控える事にした。

・・・今日は疲れた。

疲労しきつた体を畳の上に転がして、見るでもなく外に目を向けた窓の向こうには惑星のキャッツアイが見えているが・・・今の俺にはどうでもいい。

俺がバテているのだから、もちろんジェインも疲れ果て、傍に転がっている。

結局あの後、色々やったゲームの大半がミレイの圧勝に終わった。

格闘、射撃、シミュレーション・・・は、ジェインが最強だな。
俺がまともに勝負出来たり、勝つ事が出来たのは、直接体を動かす
体感ゲームのみだ。

だから無駄に勝負を挑み、こうなった訳である。

・・・しかし恐るべきは女2人の気力と体力。

フユカは「だらしない」と俺たちをからかい。ミレイは涼しい顔を
してテレビを見ている。

そして、この時もフレアに関するニュースをやっていた。

『・・・太陽で発生したフレアの衝撃波は、コーラルとサファイア
の間の宙域を外側に向け広がっています。通過して落ち着くまでの
間は、航行禁止となりますので、近付かないようにして下さい・・・

』

別にフレアなんて珍しい事じゃない。

ただそれにより生じた衝撃波やプラズマが。同じく発生したX線、
ガンマ線、高エネルギー荷電粒子を辺りに撒き散らし、航行や宇宙
空間での滞在には危険があるので注意を促す必要はある。

磁気圏により防がれた地上でも磁気嵐が起きる事があり、それは通
信障害の原因になるのだ。

だからこのニュースは、そのための宇宙天気予報だ。

宇宙空間にて

3日目。

俺にしてみれば今日からが本番である。宇宙遊泳は何度やっても楽しい。

とりあえず今日は、ホテル主催の遊泳ツアーに参加する事になっている。

午前中にホテルの施設内で、セーフティスーツの着用、無重力中での移動、非常時の対応等の講習を受ける。

その後、施設内にある円形のOGフィールドでの体験を経て、ようやく午後から実際の宇宙空間での遊泳を行うのだ。

俺は経験者ではあるものの、前회가子供の頃だったので講習を受ける必要がある。

未経験のフユカも俺と同様に参加の義務があり、ミレイとジェインは船外活動免許・・・つまりEVAライセンス保持者なので本来なら講習の必要は無いのだが、暇だからと言ってついでにきた。

おまけにミレイは、スペースシップの操縦免許まで持っている。資格を取るのが趣味なのは知ってるが・・・一体彼女は何になる気だ？いや、しかしこれは、今回の旅に大いに役立つ事になるので何も言うまい。

遊泳はライセンス保持者の監督があれば、誰でも行う事が出来る。そして、シップが操縦出来れば好きな所で遊泳を楽しむ事が出来る。好きな所と言っても、もちろん明らかに危険な場所は除外される。人工衛星や施設の軌道外、スペースデブリの少ない宙域、特殊状況下での禁止区域以外等の条件があり、その日毎の遊泳可能エリアを宇宙航行局が公表している。

なので、明日はレンタルのシップで・・・今の星の並びだとキャッ

ツアイか、シトリン、サファイアが近い。ツアーではキャッツアイ方面に行くので、シトリンかサファイア・・・やっぱり青い惑星には何となく興味がある。

航行禁止がどうなってるかにもよるけれど、出来ればサファイアの方に行きたい。

昼食後、ロビーの端にある講習室に、セーフティスーツの下に着るボディースーツ姿で、再び集合した。

セーフティスーツは何層もの構造で出来ており、当然それなりの重さがある。通常は重力を減じた空間で装着する。それでも大昔の物に比べたら羽根のように軽く、動きやすさも遥かに良い。

今回の参加者は俺たちを含め3組。4人、3人、4人の計11人である。そのうち子供は3人で、姉弟と、もう一人男の子。

今現在その子供たちは、親の制止の声を無視して室内を走り回って遊んでいる。

3人は似たような背格好で、俺はそれを微笑ましく眺めた。

別に子供好きって訳でも無いんだが、俺たちもあだったなあとと思うと、怒る気にはなれない。いや、そもそも俺には怒る気が無いが。「もう少し静かにしてほしい。」とぼやくミレイを「子供はあんなもんだって。」と、なだめているうちに扉が開いて、インストラクターが入ってきた。

インストラクターから改めての注意事項と、この後のスケジュールを聞いた後、「では付いて来て下さい。」と言う指示に従い、入った時とは違う扉から部屋を出て、でかいエレベーターに乗り込んだ。「ここを下りると0.4Gの更衣室ですので、セーフティスーツを装着して下さい。もし分からない事があれば、私や他のスタッフに声をかけて下さい。」

大丈夫です、午前の講習で完璧ですから！

いよいよだと思うと、内心で返す返事も興奮気味だ。

更衣室に着き、自分のサイズの青いラインのあるスーツを着込んで無線やライフモニターのプラグを繋いだ。スイッチを入れて左腕のディスプレイの動作チェックをし、無線の送受信のレベルと、実際に音声のやり取りができるかも仲間内で確認した。

よし、これで準備完了。

その後、送迎の時とは違うシップに乗り込み、添乗員の合図で出発した。

・・・何かすっごいワクワクする。

俺の様子に呆れたジェインが「ガキ。」とからかうが、何とでも言ってくれ。

今の俺は、自分でも否定出来ないほど浮かれている。

宇宙空間に出てしばらくは、スラスターを操作して自由に飛んで遊んだ。

しかしそれに飽きると、ただ漂って星を眺めた。

黄色味がかった茶の縞に赤道辺りの白い筋。その姿はまさしくキャッツアイの名が相応しい。もちろん実際の猫の目ではなく、他の惑星同様に宝石の名から採られたものだ。

白い筋の正体は雲で、その流れは速い。こうやって眺めていても、どんどん流れて微妙に模様を変えていく。

向きを変えれば黄色く光る半円のシトリンが見えた。半分は夜の世界で宇宙の闇に紛れている。エメラルドとルビーは、キャッツアイの後ろに並ぶ位置にあり残念ながら見えない。振り返ればコーラルと、その衛星であるの2つの真珠が見え、さらにその向こうにサファイアがあるはずのだが、遠くてどれか判らなかつた。

星の世界に音もなくフワフワと浮き、手ごたえの無い感覚に麻痺してくると、夢の世界にでも入り込んだような心地がした。

が、不意に右腕に振動がきてビククリして振り向くと、セーフティスーツの人物がいた。よく見れば、ヘルメットの向こうの顔はミレイで口が動いているものの、その声は一切聞こえない。

・・・あれ？ 無線がおかしいのか？

ディスプレイで送受信のレベルを表示してみると、双方共に0とあり・・・故障か？

急いでサブの無線に切り替えると、ようやくミレイの声が聞こえた。

「・・・ヨータ、ねえ大丈夫？ 聞こえてる？」

「ああ、今聞こえるようになった。無線がいかれてたらしい。」

「そう、運が悪いのね。」

「だな。で、何？」

「うん、あつちで惑星の解説やるって、アナウンスがあつただけど聞く？」

「いや、いい。俺はここでのんびり浮いてる。」

「そう、じゃあ私はあつちでフユカの個人授業してくる。どうも彼女はスラストターの使い方が下手で危なっかしいから。」

そう言つて指した方向には、やたらと回転するセーフティスーツがいた。

・・・なるほど。

あのままだと、下手するとどこかに行つてしまい、戻れなくなりそうだ。

「そつか、じゃあ。ありがとな。」

心配してくれたミレイに手を振ると、彼女は1つ頷いて俺の傍から離れた。さすが個人授業をしようというだけはある。流れるような無駄の無い動きで、あっさりとバタバタと回るフユカの元へと行き、その体を支えた。

摩擦による減速の起きない宇宙では、どこまでも・・・どこまでもまっすぐ行くことが出来る。もちろんその道の途中に何かがあるかもしれないが、理屈の上では慣性の法則に従い、同じ速さで、同じスピードで、止まる事無く進んで行く。

未だ宇宙には想像もつかないほど多くの謎があり、我が物顔で宇宙を行き交うようになった人類も、未だその起点に辿り着いてもないな

い。

深遠なる大宇宙。

所詮ここは宇宙の辺境で、違う銀河に属するあのアジサイの花でも咲いたような星雲のあたりには、別の起源の知的生命体たちが行き交っているのかもしれない。

あそのこの無数の星が集まった辺りにも、何種類もの知的生命体が交流しているのかもしれない。

しかし地球起源の人類は、他の生命体に期待と想像を膨らませるばかりで、未だ出会いは訪れない。

・・・まだまだ遠いもんだ。

そう考えていると、ゾツと寒気がして身が震えた。

ほんの少し。そう、たかだか庭先程度の宇宙に出て・・・闇の中に輝く星々を眺めながら色々考えていると怖くなった。

広がり続けているはずだという理屈の、行けもしない宇宙の果てではなく、今見えている光ですら人の短い時間では果てが無い。

その事に恐怖を覚えたのだ。

スラスターを操作して皆がいる場所に移動する。今は何となく宇宙に1人であるというのが嫌だ。

しかしそれでも、光と闇の美しさに魅せられる気持ちは否めなかった。

最低の旅の終わり

4日目の今日は、予め申請しておいた、6人乗りのレンタルシップのキーをフロントで借りた。

この旅は今日で終わりとなり、明日にはこの宇宙空間に別れを告げ、コーラルの重力の支配下に戻らなければならない。

昨日は宇宙の大きさに恐怖を覚えたが、今日はそんな事を考える暇もないほど遊び倒してやる。

サファイアとコーラルの間に出されていた航行禁止は、今朝早くに解除されていた。

『・・・フレアの影響ですが、2日が経過して空間は安定したと思われます。しかし念のため、レーダーで質量の偏りや電磁波の乱れが無いかを確認し、十分注意して航行するようにして下さい・・・』

起き抜けに見たニュースでそう言っていた。

という事は・・・希望通りサファイア方面に行けそうだなと眠いながらも喜び、欠伸をしてベッドから降りた。

隣のベッドのジェインはまだしっかり寝ており、長い髪が横を向いた顔の半分以上を隠している。

くすぐったくはないのだろうか？ という素朴な疑問が胸に湧いたが、そのままにして眠気覚ましのシャワーを浴びる事にした。

シャワーを終えて部屋に戻ると、ジェインはベッドの上で胡坐をかいてボンヤリしていた。

「よお、起きたか？」

「んー、・・・半分くらいな。」

酒が入っていようがなかるうが、こいつはあまり寝起きの良い方で

はない。

目を覚ましてから実際に活動出来るようになるまでには、機械で言う所の『暖機』の時間が必要になる。

髪を後ろでザックリまとめ、背を丸めて俯うつむいている姿は確かに半分眠っているらしい。

「動けるなら、顔でも洗って目を覚ませ。」

「・・・動けないからこうしてるんだ。」

まあそうなんだろうが。

「ああそうだ、サファイアとコーラルの間に出されていた航行禁止が解けてたぞ。」

ふと思いついてニューズで見た事を伝えた。俺は嬉しさから少し興奮気味なのだが、

「ふーん。」

それしか返ってこなかった。

・・・くそつ、寝起きのジェインは張り合いが無いな。

指定のレストランで、バイキング形式の朝食を食べながら今日の予定について皆で話し合った。

「どうする？ 航行禁止解除されてたから、予定通りサファイアの方に行く？」

「ああ、通れるようになったんだ？」

一度俺の言った事を、今再びミレイから聞いたはずなのに・・・ジェインは今初めて聞いたかのような反応を示してくれる。

・・・お前、やっぱり寝てたんだろう？

「俺はそれに1票。」

焼き魚を箸でほぐしながら、俺の意見を伝えた。

「えー、でも何となくまだ怖くない？ 不安定な空間って何が起きるか分からないから、危ない気がするんだけど・・・。」

しかしフカは、フルーツの入ったヨーグルトを混ぜながら眉根を寄せる。

「さて？ 航行局は解除したけど、安全性までは分からないってのが本当の所だな。正確には宇宙に安全な所なんか無いしな。」

「コーヒを啜るジェインは、何となくはぐらかして軽く笑う。そりや確かに100%安心って場所は無い。」

「じゃあ、もしサファイアの方に行かないなら、どっち行く？ とりあえず今の惑星の並びだと、シトリンの方に行くって手もあるけど、今はシトリン側に太陽の黒点があるからお薦めはしない。」

「うん、次のフレアに遭遇したくはないな。すぐに起こるかどうかはわからないが、可能性の高い場所に当たる。」

「・・・それは他に選択肢が無いって言わない？」

「フユカは呆れた視線を議長のミレイに向けるが、当の本人は気にした様子も無く別の選択肢を示した。」

「惑星の無い外の宙域に向かうつてもあるけど？」

「予想外の発言に驚き、味噌汁が気管に入りそうになってむせ、俺は激しく咳き込んだ。」

「大丈夫？」

しかし、フユカの気遣いを手で制し、結構必死に声を出した。

「・・・それは、選択肢に・・・含めないで、ほしい。」

「そう？」

ミレイの返事からしばらくの間が開いた後、他の2人は呆れた様子で失笑し・・・堪え切れずにそのまま大声で笑ってくれた。

周りにいた他の客が何事かと振り向き、注目を集めるがこの2人は一向に意に介さず。ミレイに至っては興味も無い様子で、何か俺1人だけ恥ずかしい思いをしているような気がする。

「・・・必死だ、こいつ必死だ。」

苦しそうに笑うジェインに、「それはお前もだ！」と、心の中で突っ込んでおいた。

レンタルシッポの窓の向こうに、青い青いサファイアが見えている。
・・・これは不本意ながらも、朝食時のやりとりの成果である。

サファイアはコーラルよりも外を回る惑星で、目の覚めるような青から水が豊富にある・・・らしいが、その形状は固体である。

太陽から遠い分、寒く凍てつく氷の惑星なのだ。

大気にはガスが多く、その何種類も交じり合ったガスが青以外の光が吸収してしまうため、こんなに見事な色をしているらしい。

・・・俺も説明を読んだだけなので、そのくらいの知識しか持ち得ていない。

操縦席のミレイ以外はセーフティスーツを着込み、嬉々として宇宙に飛んだ。

目に見えるサファイアはアーモンドのような形をしている。昼の部分から段々と闇に吞まれ、夜の部分は黒く塗りつぶされている。

とはいえ、船外で完全な形を見るために日の当たる側に出る事など出来ない。

当たり前だが太陽の影響が大き過ぎる。

残念ながらセーフティスーツにそこまでの耐久性は無く、まともに太陽風の熱や放射線を浴びるなんて、そんな自殺行為は出来ない。

しばらく経つと、ジェインは危なっかしいフユカに付きっ切りで、結局一人で放って置かれる形になった。

飛び回るのにも飽きてきた俺は。星の世界に浸る事にしようと宙を漂う事にしたのだが、延々聞こえてくるフユカの悲鳴は甲高く耳に付く。

なので、フユカとのラインはあっさり切ってしまった。

一方、根気良く励ましながら指導を続けるジェインの声を聞いていると、さすが家庭教師が出来る人間だなと、妙に納得してしまった。

いつ音が消えたのか記憶に無い。

目を遙か昔に放たれた彼方からの光に向けて、意識は自分の内側に向け、光の放たれた場所へ思いを馳せていたら、聞こえてくる声が気にならなくなっていた。

だから、本当に音がしなくなっていた事に気付いていなかった。

必死な様子のジェインに腕を引かれ、その時初めて無音に気付いた。・・・本当についてない俺は、また無線がいかれたらしい。急いでサブに切り替えると、

「逃げ、何か異常が起きたらしい。シップに戻るぞ。」

マジか？ 緊急事態じゃないか。

冗談で無い事は、声を聞けば判る。

「解った。」

それだけ答えてスラスターを操つり、シップに戻る軌道を取り少し速度を上げた。

「フユカは？」

「もうシップに戻った。」

「そうか。・・・悪い、俺のまた無線がいかれてた。異常って何だ？」

「ミレイが言うには、近くで質量の異常が発生したらしい。一点だけが急に増えて何が起きるか判らないそうだ。」

「なるほど・・・。」

とは言ったものの、俺にも何が起きるのか想像もつかない。

『急いで、どんどん質量が増える。』

「努力はしてる。」

現に何度かスラスターを噴射して、結構な速さが出ている。おかげで少し減速に失敗した。

「焦るな。」

ジェインの声がした。

だから今度は落ち着いて慎重に、行き過ぎた分を戻りハッチの下に

戻ると

「早く入れ。」

とヤツは入りかけた状態で待っていた。

無事2人ともシップに入り、扉が閉まりはじめた所で、何かに下に引つ張られでもするような感覚がして、景色が上に流れた。

異常な事態に思わず叫び、無線でジェインの短い叫びも聞こえた。そしてまもなく扉は閉まり、俺は無事シップの中に残っていたが、そこにジェインの姿は無かった。

はつきり言つて何が起きたのか良く解らない。しかし、今の状況から言つて、閉まりかけた扉の向こうに引きずり出されたとしたか考えられない。

「・・・何だ？ おいジェイン!？」

無線で呼びかけるが、返答は無い。

ディスプレイを見ると、ジェインの無線機の反応そのものが消えていた。

くそっ、また故障か？ この欠陥品め、リコールかけた方がいいんじゃないか？

『今の何？ 真下で一瞬高エネルギーが発生したんだけど。』

「ジェインが消えた!」

『どういう事?』

「俺に解るかっ!」

思わず叫んで、微かに聞こえたミレイの息を飲む音に後悔した。

ここで騒いだ所でどうにもならない。それよりもジェインだ。

「悪い・・・扉が閉まる前にジェインが外に出されちまった。何かに引つ張られる感覚があつて、たぶんその時だ。」

『外部のレーダーに彼の姿は・・・無い。ちよつと待って、記録を見してみるから。』

しかしレーダーにも、船内・船外の映像も記録に残っていたのは一

瞬だけで、突如として現れた高エネルギーと共にジェインの反応、
そしてその姿は消え失せた。

ミッシングリンクの真実

4日目の今日は、予め申請しておいた、6人乗りのレンタルシップのキーをフロントで借りた。

この旅は今日で終わりとなり、明日にはこの宇宙空間に別れを告げ、コーラルの重力の支配下に戻らなければならない。

昨日は宇宙の大きさに恐怖を覚えたが、今日はそんな事を考える暇もないほど遊び倒してやる。

サファイアとコーラルの間に出されていた航行禁止は、今朝早くに解除されていた。

『・・・フレアの影響ですが、2日が経過して空間は安定したと思われます。しかし念のため、レーダーで質量の偏りや電磁波の乱れが無いかを確認し、十分注意して航行するようにして下さい・・・』

起き抜けに見たニュースでそう言っていた。

という事は・・・希望通りサファイア方面に行けそうだなと眠いながらも喜び、欠伸をしてベッドから降りた。

隣のベッドのジェインはまだしっかり寝ており、長い髪が横を向いた顔の半分以上を隠している。

くすぐったくはないのだろうか？ という素朴な疑問が胸に湧いたが、そのままにして眠気覚ましのシャワーを浴びる事にした。

シャワーを終えて部屋に戻ると、ジェインはベッドの上で胡坐をかいてボンヤリしていた。

「よお、起きたか？」

「んー、・・・半分くらいな。」

酒が入っていようがなかるうが、こいつはあまり寝起きの良い方で

はない。

目を覚ましてから実際に活動出来るようになるまでには、機械で言う所の『暖機』の時間が必要になる。

髪を後ろでザックリまとめ、背を丸めて俯うつむいている姿は確かに半分眠っているらしい。

「動けるなら、顔でも洗って目を覚ませ。」

「・・・動けないからこうしてるんだ。」

まあそうなんだろうが。

「ああそうだ、サファイアとコーラルの間に出されていた航行禁止が解けてたぞ。」

ふと思いついてニューズで見た事を伝えた。俺は嬉しさから少し興奮気味なのだが、

「ふーん。」

それしか返ってこなかった。

・・・くそつ、寝起きのジェインは張り合いが無いな。

指定のレストランで、バイキング形式の朝食を食べながら今日の予定について皆で話し合った。

「どうする？ 航行禁止解除されてたから、予定通りサファイアの方に行く？」

「ああ、通れるようになったんだ？」

一度俺の言った事を、今再びミレイから聞いたはずなのに・・・ジェインは今初めて聞いたかのような反応を示してくれる。

・・・お前、やっぱり寝てたんだろう？

「俺はそれに1票。」

焼き魚を箸でほぐしながら、俺の意見を伝えた。

「えー、でも何となくまだ怖くない？ 不安定な空間って何が起きるか分からないから、危ない気がするんだけど・・・。」

しかしフカは、フルーツの入ったヨーグルトを混ぜながら眉根を寄せる。

「さて？ 航行局は解除したけど、安全性までは分からないってのが本当の所だな。正確には宇宙に安全な所なんか無いしな。」
「コーヒを啜るジェインは、何となくはぐらかして軽く笑う。そりや確かに100%安心って場所は無い。」

「じゃあ、もしサファイアの方に行かないなら、どっち行く？ とりあえず今の惑星の並びだと、シトリンの方に行くって手もあるけど、今はシトリン側に太陽の黒点があるからお薦めはしない。」
「うん、次のフレアに遭遇したくはないな。すぐに起こるかどうかはわからないが、可能性の高い場所に当たる。」

「・・・それは他に選択肢が無いって言わない？」
「フユカは呆れた視線を議長のミレイに向けるが、当の本人は気にした様子も無く別の選択肢を示した。」

「惑星の無い外の宙域に向かうつてもあるけど？」
「予想外の発言に驚き、味噌汁が気管に入りそうになってむせ、俺は激しく咳き込んだ。」

「大丈夫？」

しかし、フユカの気遣いを手で制し、結構必死に声を出した。

「・・・それは、選択肢に・・・含めないで、ほしい。」

「そう？」

ミレイの返事からしばらくの間が開いた後、他の2人は呆れた様子で失笑し・・・堪え切れずにそのまま大声で笑ってくれた。

周りにいた他の客が何事かと振り向き、注目を集めるがこの2人は一向に意に介さず。ミレイに至っては興味も無い様子で、何か俺1人だけ恥ずかしい思いをしているような気がする。

「・・・必死だ、こいつ必死だ。」

苦しそうに笑うジェインに、「それはお前もだ！」と、心の中で突っ込んでおいた。

レンタルシッポの窓の向こうに、青い青いサファイアが見えている。
・・・これは不本意ながらも、朝食時のやりとりの成果である。

サファイアはコーラルよりも外を回る惑星で、目の覚めるような青から水が豊富にある・・・らしいが、その形状は固体である。

太陽から遠い分、寒く凍てつく氷の惑星なのだ。

大気にはガスが多く、その何種類も交じり合ったガスが青以外の光が吸収してしまうため、こんなに見事な色をしているらしい。

・・・俺も説明を読んだだけなので、そのくらいの知識しか持ち得ていない。

操縦席のミレイ以外はセーフティスーツを着込み、嬉々として宇宙に飛んだ。

目に見えるサファイアはアーモンドのような形をしている。昼の部分から段々と闇に吞まれ、夜の部分は黒く塗りつぶされている。

とはいえ、船外で完全な形を見るために日の当たる側に出る事など出来ない。

当たり前だが太陽の影響が大き過ぎる。

残念ながらセーフティスーツにそこまでの耐久性は無く、まともに太陽風の熱や放射線を浴びるなんて、そんな自殺行為は出来ない。

しばらく経つと、ジェインは危なっかしいフユカに付きっ切りで、結局一人で放って置かれる形になった。

飛び回るのにも飽きてきた俺は。星の世界に浸る事にしようと宙を漂う事にしたのだが、延々聞こえてくるフユカの悲鳴は甲高く耳に付く。

なので、フユカとのラインはあっさり切ってしまった。

一方、根気良く励ましながら指導を続けるジェインの声を聞いていると、さすが家庭教師が出来る人間だなと、妙に納得してしまった。

いつ音が消えたのか記憶に無い。

目を遙か昔に放たれた彼方からの光に向けて、意識は自分の内側に向け、光の放たれた場所へ思いを馳せていたら、聞こえてくる声が気にならなくなっていた。

だから、本当に音がしなくなっていた事に気付いていなかった。

必死な様子のジェインに腕を引かれ、その時初めて無音に気付いた。・・・本当についてない俺は、また無線がいかれたらしい。急いでサブに切り替えると、

「逃げ、何か異常が起きたらしい。シップに戻るぞ。」

マジか？ 緊急事態じゃないか。

冗談で無い事は、声を聞けば判る。

「解った。」

それだけ答えてスラスターを操つり、シップに戻る軌道を取り少し速度を上げた。

「フユカは？」

「もうシップに戻った。」

「そうか。・・・悪い、俺のまた無線がいかれてた。異常って何だ？」

「ミレイが言うには、近くで質量の異常が発生したらしい。一点だけが急に増えて何が起きるか判らないそうだ。」

「なるほど・・・。」

とは言ったものの、俺にも何が起きるのか想像もつかない。

『急いで、どんどん質量が増える。』

「努力はしてる。」

現に何度かスラスターを噴射して、結構な速さが出ている。おかげで少し減速に失敗した。

「焦るな。」

ジェインの声がした。

だから今度は落ち着いて慎重に、行き過ぎた分を戻りハッチの下に

戻ると

「早く入れ。」

とヤツは入りかけた状態で待っていた。

無事2人ともシップに入り、扉が閉まりはじめた所で、何かに下に引つ張られでもするような感覚がして、景色が上に流れた。

異常な事態に思わず叫び、無線でジェインの短い叫びも聞こえた。そしてまもなく扉は閉まり、俺は無事シップの中に残っていたが、そこにジェインの姿は無かった。

はつきり言つて何が起きたのか良く解らない。しかし、今の状況から言つて、閉まりかけた扉の向こうに引きずり出されたとしたか考えられない。

「・・・何だ？ おいジェイン!？」

無線で呼びかけるが、返答は無い。

ディスプレイを見ると、ジェインの無線機の反応そのものが消えていた。

くそっ、また故障か？ この欠陥品め、リコールかけた方がいいんじゃないか？

『今の何？ 真下で一瞬高エネルギーが発生したんだけど。』

「ジェインが消えた!」

『どういう事?』

「俺に解るかっ!」

思わず叫んで、微かに聞こえたミレイの息を飲む音に後悔した。

ここで騒いだ所でどうにもならない。それよりもジェインだ。

「悪い・・・扉が閉まる前にジェインが外に出されちゃった。何かに引つ張られる感覚があつて、たぶんその時だ。」

『外部のリーダーに彼の姿は・・・無い。ちよつと待つて、記録を見ってみるから。』

しかしリーダーにも、船内・船外の映像も記録に残っていたのは一

瞬だけで、突如として現れた高エネルギーと共にジェインの反応、そしてその姿は消え失せた。

- - 12 - - - - - ミッシングリンクの真実

この異常をすぐに宇宙警察機構に連絡し、その場で到着を待った。その間も必死にレーダーを探したが、生命反応も物体の反応すら見つからない。映像記録を何度再生して確認しても、見えない何かに引きずり出されたようにしか見えぬ、余計に混乱するばかりだった。その後は新たな異常も起きず、起きた事の手がかりは一切無い。皆、口数少なく必要なやり取りだけで、余計な口を利く者はいなかった。

その重苦しい空気がしばらく続いた後、レーダーに警察の信号を出すシップが近付いてくるのが映った。

- * - - * -

到着した警察に、冷静に事情を説明したのはミレイだ。

レーダーで探っていた時もミレイが指示を出していた。ライセンス保持者だとかそんな理由ではなく、彼女が一番しつかり自分を保っていた。

一方俺はショックのあまり動揺し・・・本当とんだ役立たずだ。

- * - - * -

警察と入れ替わりくらいに宇宙航行局がやってきて、同じような事を繰り返した。

いずれもシップの航行記録とレーダーと船内・船外のカメラの記録をコピーして持って行った。

帰り際にはどちらも「全力で探索する」と言っていたが、どうせ見つからないだろうと考えているのが見え見えで、激しい怒りを感じたが、宇宙での行方不明者の生還率は非常に低いのが実情で、それは俺も知っている。

「・・・よろしく・・・お願いします。」

それでも、藁にも縋るような気持ちで頼み込んだ。

・・・

「ホテルに戻るから。」

諦めきれずに、まだしばらくはレーダーを広域にして探ってみたものの、成果は何も上がらず・・・そして、ミレイはそう言った。

俺たちに同意を求める事無く、内心の怒りを押し殺したような声で本音を言えばここを離れたくななどない。

ジェインが見つかるのを・・・戻ってくるのをこの場でいつまでも待っていたい。

しかし反面、ここにいっても何も出来ないという事も判っていた。

だから、俺は何も答えなかった。

フユカも啜り泣きを響かせるだけで、何も言わなかった。

・・・

ホテルに戻ると、俺たちの親がロビーに待ち受けていた。

なるほど、当然警察から連絡が入ったのだろう。

俺の姿を見た途端に駆け寄り「良かった」と、抱きついてくる母さんに正直複雑な気持ちだった。とてもじゃないが、安心させるための笑顔は作れない。

「俺は大丈夫だから。」

そう言う事くらいしか出来なかった。

視線をずらせばソファの一角で、ジェインの両親が警察から事情を

説明を受けている。

悲しげなおばさんの様子に俺は罪悪感で胸が押しつぶされそう、
今日の前で素直に喜び咽び泣いている母さんに「それは違う!」・・・
と、言ってしまうないように、拳を握り唇を噛み締めた。

・*・*・*

「うちの息子を探してくれて、心配してくれてありがとう。」
ジェインの父親が皆の前でそう言った。

一番辛い立場のはずなのに、俺たちにそんな気を使ってくれる事が
かえって辛い。

「息子は良い友達を持って、誇りに思ってるだろうよ。」
優しく笑いかけてくれるおじさんに、俺は絆ほだされては駄目だ。俺に
はそんな事を言われる資格なんか無いんだ!

「ごめんなさいっ!! 俺が!・・・俺が悪いんです。俺が無線が
壊れてる事にちゃんと気付いていれば、わざわざ俺に知らせに来る
こともなかったし、操作をミスして行き過ぎなければもっと早くに
シップに戻っていたはずだし、そもそも俺がサファイアの方に行き
たいって言わなければ・・・絶対こんな事にはなつてなかったんで
す。許してくれなんて言いません。だから、そんな風に言わないで
下さい。俺が・・・悪いんです・・・」

胸を占めるのは罪悪感と後悔、そして喪失感。

俺が今、無事にここにいる事が、自分で許せない。

なのに、おじさんは俺に静かに笑いかけた。

「・・・いいや、本当に良い友達だよ。だからそんなに自分を責め
るものじゃない。」

そんなに慰めないで下さい。

「リョータくん、逆なら君もそうしただろう? ジェインと君はそ
ういう仲だよ。」

当たり前だ。

「ジェインは絶対、君が悪いなんて思っでない。」
でも……。

「君がそうやって自分を責めている事を、ジェインは嫌がるだろうな。」

絶対に「バカな事言うな」って、あいつは言うだろう。

「私たちは息子の帰りを待つよ。ずっとね、だから、君たちもずっとジェインの友達でいてやってくれないか？」

当たり前だ。俺たちはずっと友達に決まってる！！

「……もちろんです。」

それから俺は泣き崩れた。

自分を許す事は出来ない。

だけど、おじさんが待つと言うなら……諦めないと言うのなら、俺だって。

俺は、自分があっさりと諦めていたんだと気付いて、心底情けなく思った。

いくら生還率が低くとも、死んだと決まった訳じゃない。死んだ姿を見た訳じゃない。

『俺は死にたくない』ってアイツは言う。だから……アイツは絶対生きている！

-.*-.*-.***-.*-.*-.*

コーラルの空は名の通りピンク色で、高く立ち上る入道雲は白く厚い。

どれだけ辛く、心が張り裂けそうなほど悲しい事が起こっても、いくら立ち止まってしまいたいと思った所で、時間は流れ、止まっでなくれない。

休みの残りは心配しきりの両親に、実家に連れて帰られた。

しかしこのジャポネ独特のうちの家は、珍しがるジェインのお気に入り遊び場だった。だから、一緒に遊んだ思い出があり過ぎて余計に辛い。

採り過ぎて怒られた夏みかんの木や、面白がって出入りしてた縁側、座布団を積み上げたり、畳の上で正座の耐久レースとか。

今思えば下らない事をして遊んでたものだと思うが、当時は相当面白かった。

そんな場所を見ないように、今は自分の部屋に籠り端末に向かってる。

時間が流れるというのは、俺にも日常があるという事で・・・レポートの締め切りまでの時間が確実に減っているという事だ。

正直辛すぎて、レポートをやるうなんて気にはなれない。しかし、それを理由にして、やらなくてはならない事を投げ出すのは逃げてるだけだ。いくら気が乗らなくても、自分の未来を捨てるようなマネは絶対にはいけない。

・・・絶対ジェインに怒られる。

だから、ヤツが残してくれたリストの資料を、メモを取りながら真剣に眺めた。

相変わらず動画の中のカーティ博士は、年を取ったジェインを見ているような錯覚に陥る。話し方や笑い方までそっくりで、妙な気分になる。

その中に雑誌の記事があった。

「私はガリレオが好きなんですよ。まあ、あの時代に生きる上では利巧な生き方では無かったのかもしれませんが。」それでも地球は回っている。」って、何かかっこいいと思いませんか？

周りに流されず、己を曲げずに正しい事は正しいって、声を上げるのは大変な事だと思いますよ。

彼の主張を頑として認めなかった教会が、350年も経って、もうとつくに本人はいないのに謝罪をしましたよね？ それはやはり彼の与えた影響力が大きく、後の世にまで引き継がれる考えと発見をしていたからですね、私もそんな学者になりたいと思いますね。』

いつかジェインが飲みながら、俺の部屋で語っていたのと同じ内容が、多少表現を変えて書かれていた。

・・・これ、ジェインじゃないか？

いや、でもこれは大昔の記録で、物理的には有り得ない。ミレイの推測に毒されてしまったんだろうか？

・・・しかし。

この姿にこの声、そしてさらに考えまで同じだと、これはどう見てもジェインだと思えなくなってきた。

えーと、これは『もしも』・・・そう、仮定の話としてなのだが・・・
宇宙に消えてしまったジェインは、どうやってかは解らないが過去に行ってしまった。

そこで、現在の・・・あちらの時代からしてみれば、遙か未来の技術を持ち込んだ。

そして、そのおかげで人類は技術の停滞期を抜け、宇宙に出る事となり現在に至る。

・・・と。

変な緊張で、手の平が汗でべた付く。

つまり、宇宙で消えたジェインは、遙か昔に辿り着き・・・そこで生きた。

そして、自分の知識と才能をフルに活用し、アイツが『パーフェクトJ』を起こした。

だから今、俺たちが地球の外にいるのは、ジェインのおかげ・・・
って事になる訳だよな？

あまりにも現実離れた仮定に、思わず笑いが漏れた。
まったくおかしくもないのに、俺は込み上げてくる笑いを止められ
なかった。

『頭では負けないつもりだ。』なんて言ってたけど、結局は自分じ
やないか。

たぶんアイツはこの未来に繋げるために、やらなきゃいけないって
理解して頑張ったんだろう。

歴史の授業でやった程度の地球にいきなり飛ばされて、知る者の無
い違う時間の人間たちの中で、訳も分からないままやるべき事だけ
解ってたんだろう。

そして、それを見事にやり遂げた。

まるで『タマゴが先かニワトリが先か』って問題みたいじゃないか。

少し年嵩である事からして、もう何年もその時間の中で暮らしてき
たのだと推測出来る。

それは『生きていた』という事で、ほんの少しだけ俺の罪悪感を和
らげてくれた。

・・・しかし、一方でこの映像は340年も昔の物である。

この事実を、俺の両目から熱い涙を溢れさせた。

- - * - * - - * * * - - * - * - -

やっとの事で涙をこらえ、気付いてしまった真実を急いでメールで
送った。

もちろんミレイとフユカにだ。

この事は、絶対に彼女たちにも知らせなければならぬ。

心配し、心を痛めているのは俺だけではないのだから。そのうち連絡が入り、詳しい説明を求められるだろう。

・・・さて、どうやって説明したものだろう？

「何で過去に？」とか「どうやって過去に行ったのか？」なんて聞かれても、それは答えられないしな。

本当・・・どうやれば過去に戻れるのか、俺が知りたいっての。そうすれば・・・

・・・いや、出来ない事を考えても仕方がない。

何だか、一気に気が抜けてしまったような気がする。

溜息について布団に倒れ、目を閉じると眩暈がした。使い過ぎた頭は少し熱くて、目は絶対に腫れている。

でも、もう少し落ち着いたら、またカーティ博士の事を調べよう。

そうすれば、その後のジェインがどうなったのか、アイツがどう生きたのかが分かるんだ。

この惑星に至るまでの科学の進歩の過程には、一部分に理由の付かない急激な発展がある。

それは一人の天才がもたらしたものののだが、この急激な変化は後の学者から不自然であるとされ、ミッシングリンクとも呼ばれている。

ミッシングリンク＝繋がらない技術の鎖

・・・そりゃ繋がる訳が無い。

未来の技術が突然過去にもたらされたのだから、繋がる方がおかしいってんだ。

・・・でも真実は、俺たちだけの秘密にしなければならぬ。
どうせ人に話しても信じてもらえない訳はない。

・・・しかし何よりこんな大事な事は、俺が話したくなんかない。

ミッシングリンクの真実(後書き)

終わりっぽいですが、もう1話あります。

10年後

ジェインがいなくなつて、あと1ヶ月で丁度10年という日、ミレイからメールが届いた。

『ジェインのいなくなつた日、皆で集まらない？』

それは俺も考えていた。

同じ思いを抱えている仲間は、胸に抱えたその錘おもりのせいで、少し関係が変わってしまった。

会えば言葉を交わすが、その前には一瞬緊張感が走つた。一緒にいれば辛さが増し、俺たちは何となく互いに距離を置くようになった。そしてそのままそれぞれの道に進み・・・以前のように皆で集まる事は無くなつていた。

そんな関係は寂しいって思いはあるし、この状況は好ましくないと分かつている。

けれど、忙殺される日々を言い訳にして、これまで具体的な行動を起こさなかつた。そして時間が経てば経つほど疎遠になつていく。だから、この節目にでも関係を修復出来ればと思つていた。

・・・それと、あともう一つ言い分けさせてもらつたらば、その一因はいち早く結婚してしまつたミレイにもある。

大学を出て1年くらいで「結婚するから」と打ち明けられて驚いた。こいつが一番とは思つてなかつたつてもあるが・・・結婚のシステムには疑問を感じるとか言いそうなヤツが、普通に結婚すると言つた事に驚いた。

他も驚く事ばかりだつたな。相手は同じ大学にいた人間で、俺は付き合つていた事すら・・・それ所か、ミレイが誰かと付き合つているなんて事も知らなかつた。やっぱりミレイは謎だと、改めて認識したもんな。

・・・それはさておき、それから何となく遠慮があるのだ。
いくら昔からの友人とはいえ、人妻を呼び出して会うというのは・・・
何となく悪い事をしているような・・・いや、もちろんそんな気
などまったく無いが、でもそう、背徳感がある。
今は3人の子供がいて、カリスマ・エッセイストになっている。
俺からすれば、相変わらず彼女のワールド全開だなと思う所なのだ
が、フアンの域を超えた信者が結構いたりする。
・・・と、メディアを通じて見かけるばかりで、実際にはもう何年
も会っていない。

一方、振られ続けていたフユカも何とかいい人を見つけ、4年くら
い前に落ち着いた。

卒業後はアパレル系の仕事をしていたが、結婚を気にスッパリと職
を捨てた。

ちなみに旦那は結婚式で始めて見て、別にその後も交流は無い。
今は2歳になる娘がいて色々大変らしいが、言う割には嬉しそう
な写真のついた年賀状を毎年送って来る。

俺？ 俺は・・・聞くな。

いや・・・俺にだって、そう思う人がいないって訳じゃないんだが・・・。

うん、何というか、やっぱり躊躇がある。

・・・俺に幸せになる資格はあるのか？ って、
で、結局あの日に一体何が起こったのか知りたくて・・・答えが欲
しくて、大学に残った。

そして今は、あの時のデータや、その後も観測を続け、ジエインが
消えた謎を解明しようとしている准教授だ。

無論教鞭に立たねばならず、人に教えるのが苦手だとか言ってい
られない身になってしまった。

しかしこの話は、すぐにおかしな事になった。

ミレイに返事を返すと、

『私そんなメールを送っていないよ。フユカからそういうメールはもらったけど。』

・・・どういう事だ？

そして、フユカからメールが届いた。

『メールありがとう。もう10年なんだね・・・うん、久しぶりに皆で集まろう。』

・・・訳が分からない。

俺はフユカにメールを送っていない。

だから、2人にメールを送った。

『フレンディーズのch3521に来てくれ。』

つまりチャットに誘ったのだ。

すぐに直接会う事は出来ないが、顔を見ながら直接話すことは出来る。

この訳の分からない事は、いちいちメールを飛ばすより直接話した方が早い。

- - * - * - - * * * - - * - * - -

丁度10年目の当日。ジェインの実家に皆で顔を出した。

久しぶりに会ったおじさんとおばさんに挨拶して、それぞれの今について話した。

そして、その後はそのまま俺の実家に流れた。

結局メールの件は解決しなかった。3人が3人とも誰にもメールを送ってなどいかなかったのだ。本当にあれは、一体誰が出した物なのだろう？

それでも、良い機会だからそのメールに乗っかるうという事で落ち着き、今日を迎えた訳だ。

しかし、チリンと涼しげな音をたてる風鈴の下がる縁側に一列に座り、玉の汗を流す麦茶のグラスを思い思いに傾けながら、皆一様に押し黙っていた。

久しぶりに会って、最初に近況を話してしまえば、次の話題が出てこない。

昔もみんなでこうやって座り、おやつを食べながら騒いでいたが、その時はこの場にもう一人いるのが当たり前だった。

・・・だから皆黙っているんだ。感傷に浸っているか、浸らないように我慢してるか、どっちかは分からないけど、今、口を開けばジェインの名が出てきてしまう。

ジェインを口実に集まったのではあるが、口に出してヤツの事を語るのは、俺にはまだ無理だ。いや、おそらくずっと無理だ。

時は流れても思い出は変わらない。

いや、時が経てば経つほど、思い出は理想を含み色合いを増す。違う場所にすれば良かったかもしれない。

珍しがってやたらと出入りしたこの縁側も、今は実の無い庭の夏みかんの木も、花火をした庭も思い出が多過ぎる。

いや違う！ こうしてシンミリしてたら、今日集まった意味が無い。関係の修復を図りたいのだから、何かを言わなければならない。

・・・ただ何を言えいいのか分からない。

「何も考えずに思いつきり遊ぼう」なんてのは、いい年しておかしいし、「ジェインの事は忘れて、また仲良くしないか？」・・・なんてのは嫌だし。

難しいな。

そうしてイライラと考え込んでいると、不意にチャイムが鳴った。

パタパタとスリッパの音をたてて母が玄関に向かったのだが、すぐに俺の名を呼んだ。

- * - - * -

「大きい箱ねえ、リョータ何か頼んだの？」

そう言うのも当然で、長さ250cm、幅100cm、高さ80cmくらいの金属の塊が防水ビニールに包まれている。どれくらいの重量なのか分からないが、到底人の手では動かせそうもない。今宅配の人が使っているエア・リアカーでも使わないと無理だろう。

「知らないよ。俺何も頼んでないし、第一頼んでも実家には送らないって。」

「でも、受取人はリョータよ？」

「・・・はい？」

受取証を母から受け取り、受取人の名前を見ると確かに俺の名前だった。

そして、差出人の名前を見ると『ジェイン・カーティ』とあり、息を呑んだ。

「あ、あの、これ庭のほうに入れてもらえますか？」

心臓が急に跳ね、息苦しさを覚えながらグリーン・エクスプレスの配達員に頼んだ。

ジェインは何を寄越してきたんだ？ 10年前にいなくなったのに、アイツはいつこんなものを仕込んでたんだ？

板垣に注意しながら、慎重にエア・リアカーを操作し庭まで運び入れてもらうと、フユカとミレイが、「何それ？」とそれぞれに尋ねてきた。

「わからん・・・が、ジェインからだ。」

当然2人も、俺と同じように息を飲んだ。

「・・・何でジェインが？」

「さあ、随分と手間のかかる仕掛けをしてたらしいな。」

「・・・そうね、じゃあ空けましょう。」

この暑いのに青い顔をしたミレイが、縁側から降りて荷物に近付き、表面を覆う防水用のビニールを剥がし始めた。

「やる事早いな。」

「だって気になるじゃない。」

結婚してようがしてまいが、彼女は相変わらずだ。

一方フユカは、縁側に座ったまま近付けずにいる。予測不能の出来事に、状況の整理がつかないのかもしれない。

時間の劣化によるものか、一部張り付いてしまったビニールを俺も一緒に頑張って必死に剥がすと、小さなディスプレイとアルファベットのコンソール、そして小さなメモが貼り付けてあった。

『君たちの名前を』

そのメモに書かれていたのはたったそれだけ。

しかし、その字を見ると懐かしさが込み上げてくる。少し右上がりの細い線は確かにジェインのものだ。

順番とかあるのか？ と、気にならない訳ではないが、指示に従い3人の名前を入れると中で何かが忙しく動く音がして、ディスプレイに『10:00』と表示された。

そして、ディスプレイの数字は徐々にその数を減らしていった。

- * - - * -

10分後、カウントが『0』になり、続いて『OPEN』と表示されるとロックの外れる音がして、冷やりとした白い煙を吐き出しながら蓋が開いた。

そして、煙が薄れるともう1つ内側の蓋が開き、よく知る人物が姿を現す。

・・・正確には、記憶にあるよりいくらか年を取っている。そう、映像でよく見る姿そのままだ。

そいつはゆっくり目を開けて、何度か瞬いた後、俺に気付くと、
「よっ、久しぶり。」

と、何て事ない挨拶をしゃがった。

「人の気も知らないで何てヤツだ。
だから、負けずに言い返してやった。」

「お前、今日はやけに寝起きがいいじゃないか。」

「・・・せつかくの感動の再会の一言目がそれか？ まあこれは特殊な眠りだから、俺の寝起きは関係ない。」

冷凍睡眠装置が世の中にある事は知っているが、それは医療目的であつたり、遙か遠くへ旅立ちたいヤツが使うもので、日常生活には一切関係ない。よって、実際に使った事はない。

「しかし10年ぶりだぞ？ 今まで何してたんだ？」

俺の感覚から言えばそうなるのだが、実際にはそんなレベルの話では無いはずだ。

「使命を果たしてきた・・・って、とこかな？」

悪戯を仕掛けた時みたいに笑う姿は、正直泣きそうだ。

もう会えないと10年前に思った。もう映像でしかその姿を見る事は無いと思っていた。なのに・・・。

「自分の時間を止めての時間移動？ 無茶するわね・・・まったく。」

涙声のミレイが、ジェインの傍で膝をついた。

「ああ、正直賭けだったんだが、無事成功したみたいで良かったよ。」

ジェインは確認するように腕や足を動かしていたが、あっさり体を起こしてミレイの涙を拭いてやった。

「良かった・・・。」

出遅れたフユカも、涙でグシャグシャだ。

「未だコーラルが存在しない時代から、きちんとこの日のこの場所に配送されるか、皆が集まってくれるかも不安だったんだが・・・やっぱ俺は天才だな。パーフェクトJの名は伊達じゃないだろ？」

じゃあ、あのメールの送り主はジェインだったのか？

350年も前から仕掛けてたって・・・一体どんな手を使ったんだか、俺には想像もつかない。諦めずに無茶をする所もそのまんまだな、

「ははっ・・・何てヤツだ。それ笑えねえよ。」
まったく、笑おうにも涙しか出てこないっての。

コールドスリープ装置から抜け出したジェインは、夏の空を眩しそうに見上げて微笑み、そして嬉しそうな声を上げた。

「これこれ、やっぱり空はこの色じゃないとな。」

俺たちにはいつもと変わらない当たり前の色だ。しかしアイツが長い長い眠りにつくまで見ていた空は、青い色をしていたのだから。

記録映像でしか見た事の無い、不思議で美しい色・・・けれど、この空が一番なのかもしれない。満足そうなジェインを見てると、何となくそう思った。

当たり前のいつもの事・・・そして、いつもの仲間。幸せになるうとするのに資格なんかいらなくて、変に気にするものもおかしくて、当たり前前に生きている事、それこそが幸せというものかもしれない・・・って。

俺は・・・後悔の鎖から放たれて、今やっと自分を許せるような気がした。

パーフェクトJから350年。

・・・妙な偶然だなこれ。

これじゃ、何となくガリレオみたいじゃないか？

10年後（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。

当初は、帰って来るなんて考えてなかったのですが、何となくシックリこなくて。

やっぱりハッピーエンドがいいです、はい。

きっと今後も大変でしょうが、居場所があるので彼は大丈夫です。

。 如何でしたでしょうか？ たぶん広げた風呂敷は全部畳んだはず……
。 ありがとうございます？ 途中でオチ、バレちゃってましたか？

これを書くに当たって、すごいウィキペディアのお世話になりました。

太陽関連、惑星、地球、光、何度もいっぱい読みましたが……大した事無い？（^^）；

次、1本書いてから、その次に「サマーグリーン」って惑星のお話を書いて、

空想科学祭に参加したいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5005u/>

ミッシングリンク

2011年7月17日04時27分発行